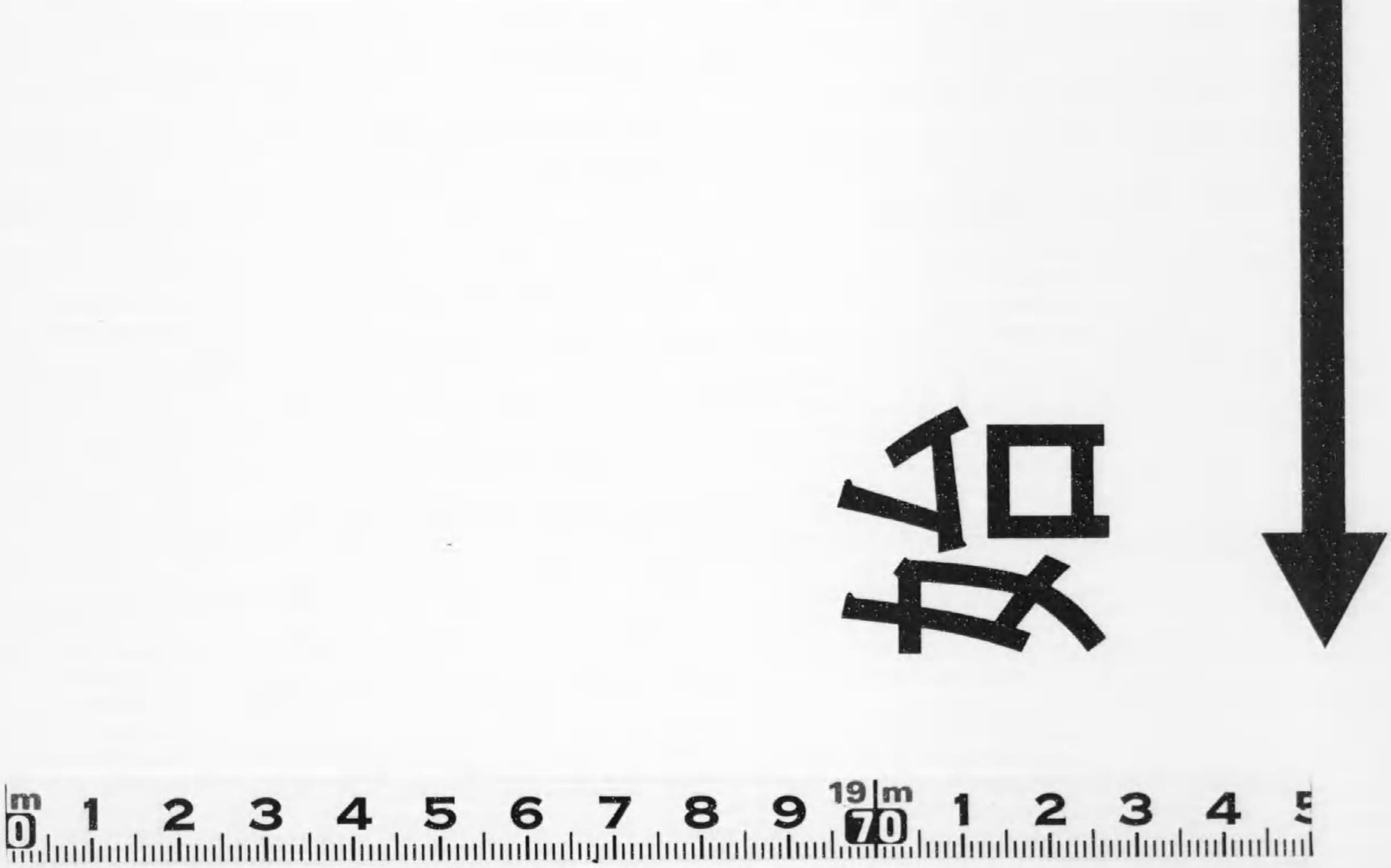
投函
m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19 m 70 1 2 3 4 5

特109
820

一日一訓

偉人と修養

山田愛劍 著

東京新興社發行

大正
14. 2. 2
内交

序

六千萬人、人口は多い。中に就いて、英雄偉人を以て見せらるべき者が、幾人あらう。滔々として皆これ、小十把一括げ的の小人物のみである。誰れ彼れといつた所で要するに、團栗の脊競べに過ぎない。蓋し、英雄といひ、偉人といふ、その名、決して徒爲ではない。渾身の至誠、天下の爲めに憂ひ、蓋天の氣魄、國家の重きに任ずる者、即はち、英雄である、即はち偉人である。今の世に、這般の英雄、偉人がないのは、まことに萬人の不幸である。きばれ、丈夫兒の生くる、碌々として已むべきではない。手を擧げ、足を投ずる所坤圓球上、何等か不磨の痕迹を留め得て、始めて、眞の丈夫である。

一日一訓 偉人と修養

目次

一の一　（太田道灌）　正直の頭に神宿る（和諺）……一
一の二　人生は朝露の如し（漢書）……三
一の三　三界は皆苦なり國土も何の頼みかあらん（仁王經）……五
一の四　歳寒うして然る後松柏の後れて彫む事を知る（孔子）……八
一の五　（北條早雲）　主將の法は務めて英雄の心を攬る（三略）……九
一の六　陰徳あれば必らず陽報あり（列女傳）……一一
一の七　齒は舌より堅くしてこれに先だちて破る（淮南子）……一四
一の八　（武田信繁）　兄弟は十指の如し（藤原惺窩）……一六
一の九　和光同塵（和諺）……一八
一の十　（山本晴幸）　我れを知る者希なれば則ち我れは貴し（孔子）……一九
一の十一　（今川義元）　何によらず稚と云ふことを離れぬ間は物の成り上ることなきなり（橘本左内）……二三

然り、丈夫の期する所は、能く、英雄たり、偉人たるに在つて、而も、英雄たり、偉人たらんと欲するは、英雄たり、偉人たるの第一歩である。

著者は、今の平凡時代に慊焉たる者である。こゝに、古英雄の言行、事蹟を紹介するもの、微意の存する所は、聊か以て、今の人の發憤を促し、これをして、英雄的修養を積ましめんと欲するに在る。碌々の間に五十年の生涯を終らんと欲する者は已む苟くも、丈夫の本領を全くすべく心がくる程の人は、本書に依つて、若干、得る所があるであらう。

所感一言、以て序とする。

著者しるす

一の十二　（三好長慶）
一の十三　（毛利元就）
一の十四
一の十五
一の十六
一の十七
一の十八
一の十九　（北條氏康）
一の二十　（武田信玄）
一の廿一
一の廿二
一の廿三
一の廿四
一の廿五
一の廿六

人

美しい行儀は美術中の美術である（エマーソン）……二四
人君となりては仁に止まり人臣となりては敬に止まる（大學）……二五
君たるの道は必らず須らく先づ百姓を存すべし（貞觀政要）……二六
萬能利きの一心叶はず（和諺）……二七
力を以て人を服するは心の服するに非ざるなり徳を以て服するは中心悅んで誠に服するなり（孟子）……二九
自ら恃め（ラフオンテーヌ）……三一
お髭の塵を拂ふ（和諺）……三三
孟之反伐らず（論語）……三三
吉凶禍福は己れのみ天に非ず（家語）……三五
窮鼠猫嚙む（和諺）……三六
民の事に從ふや常に幾んど成るに於てこれを破る（老子）……三八
能ある鷹は爪を隱す（和諺）……四〇
商人利を重んじて別離を經んず（白樂天）……四一
己れに己ちて禮に復るを仁と爲す（孔子）……四三
果報寢て待て（和諺）……四四

一の廿七　備はるを一人に求むる勿れ（論語）……四五
一の廿八　利根に妙味なし鈍根に妙味あり（僧澤庵）……四六
一の廿九　郷愿は德の賊なり（孔子）……四七
一の三十　十分は溢れる（和諺）……四八
一の卅一　（馬場信房）　諸苦の因る所貪慾を本と爲す（法華經）……四九

＊　＊　＊

二の一　琴柱に膠（和諺）……五一
二の二　人生は戰爭である（カーライル）……五二
二の三　（山縣昌景）　自慢高慢馬鹿の中（和諺）……五三
二の四　道に聽いて塗に說くは德をこれ棄つるなり（孔子）……五四
二の五　（內藤昌豊）　求めなきはこれ至貴足るを知るはこれ至富心を安んずるはこれ至樂（安藤省庵）……五五
二の六　歲月は人を待たず（陶淵明）……五七
二の七　（上杉謙信）　仁は勇を以てせず義は力を以てせず（董公）……五八
二の八　士の道義より大なるはなし（吉田松陰）……五九
二の九　死生命あり（孔子）……六〇

二の十　その爭ひや君子なり（孔子）……六一
二の十一　信豚魚に及ぶ（易經）……六三
二の十二　爾曹の敵を愛み爾曹を詛ふ者を視し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害……六四
もの、爲めに祈禱せよ（基督）
二の十三　君子は人の美を成して人の惡を成さず小人はこれに反す（孔子）……六五
二の十四　大丈夫事を行ふ當に磊々落々日月の皎然たるが如くなるべし（石勒）……六六
二の十五　（高坂昌信）　兵強ければ則ち勝たず（老子）……六九
二の十六　滿は損を招き謙は益を受く（尙書）……七〇
二の十七　猿に冠（和諺）……七二
二の十八　らしくせよぶるべからず（和諺）……七三
二の十九　（山中鹿之助）　朋友信あり（支那俚諺）……七五
二の二十　艱難に優る教育はない（ピーコンスフキールド）……七六
二の廿一　人一生の間に生れて白駒の隙を過ぐるが如し（魏徵）……七八
二の廿二　（竹中重治）　曠としてそれ谷の如し（老子）……八〇
二の廿三　人の過ちは各のその黨に於てす（孔子）……八三
二の廿四　解脫とは束縛を離るゝ義なり（解脫道論）……八四

二の廿五　危きこと累卵の如し（史記）……八六
二の廿六　形を以て物の役と爲す（陶淵明）……八七
二の廿七　大丈夫當に屍を馬革に裹むべし安んぞ能く兒女の手に死なんや（馬援）……九〇
二の廿八　（織田信長）　虱を捫りていひ傍らに人なきが若し（晉書）……九一

＊　＊　＊　＊　＊

三の一　人は見かけによらぬもの（和諺）……九三
三の二　善に遷りて過ちを改む（周易）……九四
三の三　樂は苦の種苦は樂の種（和諺）……九五
三の四　功成りて居らず（老子）……九六
三の五　人を知らざることを患ふ（孔子）……九七
三の六　禮といひ禮と云ふ玉帛をいはんや（孔子）……一〇〇
三の七　迹を踐まず亦室に入らず（孔子）……一〇一
三の八　（森蘭丸）　好んで小慧を行ふ（孔子）……一〇三
三の九　命を知る者は巖牆の下に立たず（孟子）……一〇五
三の十　思ひ内にあれば色外に見はる（和諺）……一〇六
三の十一　（明智光秀）　約束上手の行ひ下手（和諺）……一〇七

三の十二　（[illegible]）　吾れ試ひられず故に藝あり（孔子）……一〇九
三の十三　糟糠の妻は堂より下さず（宋弘）……一一一
三の十四　人間萬事塞翁が馬（和諺）……一一三
三の十五　德孤ならず必らず隣あり（孔子）……一一六
三の十六　（明智光春）　士は己れを知るものゝ爲めに死す（史記）……一一八
三の十七　生は寄なり死は歸なり（淮南子）……一二〇
三の十八　花は櫻木人は武士（和諺）……一二二
三の十九　人生は朝露の如し何んぞ久しく自ら苦しむること此くの如くなる（漢書）……一二四
三の二十　小人は心思外に向ひて人前を愼しむのみ（熊澤蕃山）一二七
三の廿一　（龍造寺隆信）　君子は泰かにして驕らず小人は驕りて泰かならず（孔子）……一二八
三の廿二　思ひ立つたが吉日（和諺）……一二九
三の廿三　（戸次鑑連）　名を好めば爲さゞる所あり（江村專齋）……一三一
三の廿四　（吉川元春）　小なる事は分別せよ大なる事は驚くべからず（德川光圀）……一三二
三の廿五　（瀧川一益）　士道に志して惡衣惡食を恥づる者は未だ與に議るに足らず（孔子）……一三四
三の廿六　（島津家久）　その爭ひや君子なり（孔子）……一三六

三の廿七　（眞田昌幸）　賢を賢として色に易ふ（子夏）……一三七
三の廿八　道前に定まれば窮まらず（中庸）……一三九
三の廿九　海濶うして魚の躍るに從ひ天空し うして鳥の飛ぶに任す（林羅山）……一四〇
三の三十　質朴なのは英雄の本色である（マコーレー）……一四四
三の卅一　（稻葉一鐵）　道理に從つて怒りを制し得る人はこれを勇士と稱してよい（プラトン）……一四五

＊　＊　＊

四の一　（福島綱成）　溝をばずんと飛べ（澤庵和尙）……一四九
四の二　（大須賀康高）　その身を外にして身存す（老子）……一五〇
四の三　（堀秀政）　聖人は常の心なし百姓の心を以て心と爲す（老子）……一五一
四の四　牛溲馬勃敗鼓の皮も但に收め並び蓄へ用ゐ待ち て遺すことなきものは醫師の良なり（韓退之）……一五三
四の五　自ら反して縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん（孟子）……一五五
四の六　（太田三樂）　その鋭を挫きその紛を解きその光を和げその塵に同ず（老子）……一五六
四の七　（本多重次）　可なり簡なり（孔子）……一五八
四の八　言葉多きは品少なし（和諺）……一五九

四の九　人を見て法を設け（和諺）……一六一
四の十　士は己れを知らざる者に屈して己れを知る者に伸ぶ（晏子）……一六二
四の十一　主と臣と同じきは昌へ主と臣と同じからざるは亡ぶ（三略）……一六四
四の十二　國を憂ひて家を忘れ軀を殞して難を濟ふは忠臣の志なり（文選）……一六六
四の十三　私臣は忠ならず忠臣は私せず（後漢書）……一六七
四の十四　斧鉞を迎へて敢へて諫め鼎鑊に據りて言を盡す（抱朴子）……一六九
四の十五　（大久保忠世）　艱難に會して始めて眞の朋友は判る（シセロ）……一七二
四の十六　聖主は賢臣を以て寶と爲し珠玉を以て寶と爲さず（鹽鐵論）……一七五
四の十七　（蒲生氏郷）　勇力世を振はしてこれを守るに怯を以てす（孔子家語）……一七六
四の十八　士は己れを知る者の爲めに死す（史記）……一七八
四の十九　眞實は勇氣の源である（ピンダー）……一七九
四の二十　英雄でなければ英雄を知ることは出來ない（ゲーテ）一八〇
四の廿一　質朴は英雄の本色である（マコーレー）……一八二
四の廿二　身を以て率ゐる（和諺）……一八三
四の廿三　恩を知らざるものは鬼畜の如し（和諺）……一八四

四の廿四　（酒井忠次）　始めを愼しみ終りを慮かる（貝原益軒）……一八六
四の廿五　（小早川隆景）　井の内の蛙大海を知らず（和諺）……一八一
四の廿六　面從腹非（和諺）……一八九
四の廿七　山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し（王陽明）……一九〇
四の廿八　愚者の一得智者の一失（和諺）……一九一
四の廿九　心誠にしてこれを求むれば中らずと雖も遠からず（大學）……一九三
四の三十　約束と履行とは別事である（英國俚諺）……一九四

＊　＊　＊

五の一　過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し（孔子）……一九七
五の二　柳の枝に雪折れなし（和諺）……一九九
五の三　（豊臣秀吉）　道を行ふ者天下擧つて毀るも足らずとせず天下擧つて譽むるも足れりとせざるは自ら信ずるの厚きが故なり（西郷南洲）……二〇〇
五の四　千里の道も足下から（和諺）……二〇一
五の五　情けは人の爲めならず（和諺）……二〇三
五の六　怒りて日の入る迄に至ること勿れ（基督）……二〇五

五の七　仁者には敵なし（孟子）……二〇七
五の八　怨みに報ゆるに德を以てせよ（老子）……二〇八
五の九　戰はずして人の兵を屈す（孫子）……二一一
五の十　可もなく不可もなし（孔子）……二一二
五の十一　兵を抗げて相加ふれば哀しむ者勝つ（老子）……二一五
五の十二　拔かぬ太刀の功名（和諺）……二一六
五の十三　その雄を知りて其雌を守れば天下の谿となる（老子）二一八
五の十四　鳶飛んで天に戾り魚淵に躍る（詩經）……二二〇
五の十五　柔能く剛を制し弱能く强を制す（三略）……二二一
五の十六　忍の明たる日月を踰えたり（忍辱經）……二二三
五の十七　一忍以て百勇を以て支ふべく一……二二四
五の十八　靜以て百動を制すべし（蘇洵）
五の十九　王侯將相寧ぞ種あらんや（史記）……二二六
五の二十　古人今人流水の如し（李白）……二二八
五の廿一　上に居る者は寬を以て道と爲して
五の廿二　察を好むことを欲せず（伊藤仁齋）……二三一
五の廿三　惠んで費さず（孔子）……二三一
五の廿四　雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひん（孔子）……二三二
五の廿五　楚王弓を失ふ楚人これを得んヌ
五の廿六　た何ぞこれを求めん（孔子家語）……二三四

五の廿七　飽くまで食ひ終日心を用ふる所なし
五の廿八　難いかな博奕なるものあらずやこれ……二三五
五の廿九　を爲すは猶ほ已むに賢れり（孔子）
五の三十　この倨々たる者は何れぞや（孔子家語）……二三七
五の卅一　大人は赤子の心を失はず（孟子）……二三八
五の卅二　善く士たる者は武からず（老子）……二三九
五の卅三　事大小となく正道を踏み至誠を推し
五の卅四　事の詐謀を用ゆべからず（西鄉南洲）……二四一
五の卅五　巧僞は拙誠に如かず（說苑）……二四三
五の卅六　一切有爲の法は夢幻泡影の如し（金剛經）……二四四
五の卅七　財聚まれば民散ず財散ずれば民聚まる（大學）……二四六

＊　＊　＊

六の一　人察なれば徒なし（荀子）……二四九
六の二　智者の心は留滯なきこと流水の如し（熊澤蕃山）……二五一
六の三　吾れ嘗つて終日食はず終夜寢ねずして
六の四　以て思ふ益なし學ぶに如かず（孔子）……二五二
六の五　子怪力亂神を語らず（論語）……二五三
六の六　眞の友は不變の友である（ジョーサマグドナルド）……二五四

六の九　（前田利家）兄弟牆に鬩げども外その侮りを禦く（詩經）……二五六
六の七　その君を知らずんばその使ふ所を視よ（孔子家語）……二八
六の八　先生の風は山高く水長し（范仲淹）……二九
六の九　富貴なれば他人も合ひ貧賤なれば親戚も離る（文選）二六〇
六の十　志滿つれば九族乃はち離る（書經）……二六三
六の十一　（長曾我部元親）英雄でなければ英雄を知ることは出來ぬ（ゲーテ）……二六四
六の十二　（北條氏規）劍は一人の敵のみ學ぶに足らず（項羽）……二六五
六の十三　士に貴ぶ所はその節義あるを以てなり（賴山陽）……二六七
六の十四　（鳥居元忠）君は元首たり臣は股肱たり（後漢書）……二六九
六の十五　忠臣は二君に事へず（王燭）……二七一
六の十六　難きを先にして獲るを後にす（孔子）……二七二
六の十七　（大谷吉隆）運は天に在り（和諺）……二七三
六の十八　君臣を使ふに禮を以てし臣君に事ふるに忠を以てす（孔子）……二七五
六の十九　仁は安宅なり（孟子）……二七七
六の二十　身を棺郭の中に投じ地下千尺の底に埋了以後に非ずんば輿に天下の經綸を語るべからず道……二七八
義道德もそれからの事なり（河井繼之助）

六の廿一　（島左近）積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり（易經）……二七九
六の廿二　（石田三成）堪忍五兩（和諺）……二八一
六の廿三　人生意氣に感ず功名誰れか復た論ぜん（魏徵）……二八二
六の廿四　回やそれ庶いか屢ば空し（孔子）……二八五
六の廿五　才に任せて爲すことは危くして見てをられぬものぞ（西鄕南洲）……二八六
六の廿六　その人と爲り小しく才ありて未だ君子の大道を聞かず則ち以てその軀を殺すに足るのみ（孟子）……二八七
六の廿七　怒るものは常の情なり笑ふ者は測るべからず（魚朝恩）……二八八
六の廿八　無用のものはマタ一文でも高い（セネカ）……二九〇
六の廿九　堂々たるかな張や與に並びて政を爲し難し（曾子）……二九一
六の三十　この心を擧げてこれを彼れに加ふるのみ（孟子）……二九二

＊　＊　＊　＊

七の一　商人利を重んじて離別を輕んず（白樂天）……二九五
七の二　道理の命する所に從つて怒りを制することの出來る人はこれを勇者といつてよい（プレトー）……二九七
七の三　これその不可なるを知りてこれを爲す者か（論語）……二九九

七の四　死して後已む（論語）……三〇一
七の五　運命の循環は水車よりも速い（ドンクキゾー）……三〇三
七の六　勝敗は時の運（和諺）……三〇四
七の七　死生を取つて餘事に附す（吉田松陰）……三〇五
七の八　（小西行長）自ら恃め（ラ、ヲチンテーヌ）……三〇七
七の九　飽食煖衣逸居して教へなければ禽獸に近し（孟子）……三〇九
七の十　曲れば全し（老子）……三一〇
七の十一　形を宇内に寓すること復た幾時ぞ（陶淵明）……三一三
七の十二　（佐野了伯）古へを以て鏡と爲さば以て興替を知るべく人を以て鏡と爲さば以て得失を明かにすべし（貞觀政要）……三一四
七の十三　（井伊直政）三軍も帥を奪ふべし匹夫も志を奪ふべからず（孔子）……三一六
七の十四　（内藤正成）亦た仁義あるのみ（孟子）……三一七
七の十五　その君に非ざれば事へず（孟子）……三一八
七の十六　（前田玄以）働くより工面（和諺）……三二一
七の十七　（黒田孝高）理に當りて後進み勢ひを審かにして後動く爲さざる所あり成らざるなきを成すなり（陳籠川）……三二三
七の十八　狡兎死して走狗烹らる（韓信）……三二四
七の十九　金錢は肥料と同樣撒かなければ用をせぬ（ベーコン）……三二五

七の二十　無用の用（莊子）……三二七
七の廿一　忠信にして祿を重くするは士を勸むる所以なり（中庸）……三二八
七の廿二　功遂げて身退くは天の道なり（老子）……三二九
七の廿三　政を敷くにと優々たり（詩經）……三三一
七の廿四　勤むれば賢しからず（左傳）……三三三
七の廿五　人を殺すことを嗜まざる者能くこれを一にせん（孟子）……三三四
七の廿六　再びすればこれ可なり（孔子）……三三六
七の廿七　人を使へば苦を使ふ（和諺）……三三七
七の廿八　優游年を終ゆ（詩經）……三三八
七の廿九　（榊原康政）仁人は天下に敵なし（孟子）……三四〇
七の三十　爾虎共に鬪はゞその勢ひ共に生きず（廚相如）……三四三
七の卅一　功成りて居らず（老子）……三四四
八の一　（堀尾忠氏）愚者は自ら智とし智者は我が愚を知る（シエークスピア）……三四七

* * *

八の二　人生古へより誰か死なからん丹心を留め取りて汗青を照す（文天祥）……三四八

八の三　（徳川忠吉）吾が老を老として以て人の老に及ぼし我が幼を幼として以て人の幼に及ぼさば天下を掌に運らすべし（孟子）……三四九

八の四　苟くも仁に志せば惡しきことなし（孔子）……三五〇

八の五　孝弟は仁を爲すの本か（有子）……三五一

八の六　（徳川秀康）虎豹の子は未だ文を成さずと雖も已に牛を食ふの氣あり（尸子）……三五三

八の七　大敵を見て勇む（後漢書）……三五四

八の八　剛毅なる人は惡意を懷かないそして和議の成ると同時に戰爭の損害を忘れてしまふ（クーパー）……三五五

八の九　貴くして賤しきに下れば衆惡ます（韓詩外傳）……三五六

八の十　君子は義に喩り小人は利に喩る（孔子）……三五七

八の十一　君子の過ちは日月の食の如し過つや人皆これを見る改むるや人皆これを仰ぐ（子貢）……三五九

八の十二　勇にして禮なければ則ち亂る（孔子）……三六〇

八の十三　（京極高次）已れを責めて人を責めざれば怨む事なし（伊藤仁齋）三六二

八の十四　（細川藤孝）學んでこれを集め問うてこれを辨ず（易經）……三六四

八の十五　水清ければ大魚なし（班超）……三六六

八の十六　學者始めて學者を知る（シンゲールス）……三六八

八の十七　學んで厭はず人を誨へて倦まず（孔子）……三六九

八の十八　學んで思はざれば罔く思うて學ばざれば殆し（孔子）三七〇

八の十九　（島津義久）難きを先にして獲ることを後にす（孔子）……三七二

八の二十　三人行へば我が師ありその善なる者を擇びてこれに從ひその不善なる者はこれを改む（孔子）……三七三

八の廿一　燒野の雉子夜の鶴（和諺）……三七四

八の廿二　これを道くに政を以てしこれを齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥なしこれを道くに政を以てしこれを齊ふるに禮を以てすれば恥ぢありて且つ格る（孔子）……三七五

八の廿三　（淺野長政）天の道は爭はずして善く勝つ（老子）……三七七

八の廿四　命に逆うて君を利すこれを忠臣と云ふ（說苑）……三七八

八の廿五　敵に秘密を知らすまいとならば朋友にも語るな（土耳古俚諺）……三八一

八の廿六　誠實は最良の方便である（ピーコンスフキールド）……三八二

八の廿七　締袍戀々故人の意あり（范雎）……三八四

八の廿八　奢れば不孫驕なれば固しその不孫ならんよりは寧ろ固しかれ（孔子）……三八五

八の廿九　貧困は依頼を强ひ腐敗に導く（ウヨシツン）……三八六

八の三十　詐りを逆へす信せざるを億らす（孔子）……三八九

八の卅一　（[illegible]）徳を行ふべき餘地は常に存在する（セネカ）……三九〇

九の一　（本多忠勝）

力を以て人を服するものは心服するに非ず力贍らざれば人を服するなり……三九二
者は中心悅んで誠に服するなり（孟子）
水清ければ大魚なし宜しく簡易なるべし（班超）三九四
小道と雖も必らず觀るべきものあり遠きを致さず……三九七
ば恐らく泥まんことを以て君子は爲さず（子夏）
藝は身を助ける（和諺）……三九八

九の二　（堀尾吉晴）

名利の人これ小人といふ（熊澤蕃山）……三九九

九の三

九の四

九の五

九の六

九の七　（加藤清正）

戰功は勇敢の子である（ピロコメスキルード）……四〇〇
首を俛し耳を帖れ尾を搖かして憐みを乞ふは我が志に非ず（韓退之）……四〇一
勁松は歲寒に彰はれ貞臣は國危に見はる（文選）……四〇四

九の八

九の九

怨みを匿くしてその人を友とするは左丘明これを恥づ丘も亦これを恥づ（孔子）……四〇六
大丈夫當に馬革を以て屍を裹むべし安んぞ能く兒女の手に死なんや（馬援）……四〇八

九の十

九の十一

予のすべての行動を導くものは我が國の利益である（小ケート）……四〇九
利を見て義を思ひ危きを見て命を授け久要平生の言を忘れざる亦た以て成人と爲すべし（子路）……四一一
剛毅木訥仁に近し（孔子）……四一二

九の十二

九の十三

九の十四

九の十五

眞の友誼は不朽である（ピザゴラス）……四一四
人の行ひ孝より大なるはなし（和諺）……四一六

九の十六

以て六尺の孤を託すべく以て百里の命を寄すべし大節に臨んで奪ふべからず君子の人か君子の人なり（曾子）……四一七
危きを見て命を致す（子張）……四一九

九の十七

九の十八

九の十九

九の二十

溫にして厲し（論語）……四二〇
恥ぢを知れば義に近づく（孔子）……四二二

九の廿一　（平岩親吉）

和して流れず（中庸）……四二三
賢を進むれば上賞を受く（漢書）……四二四

九の廿二　（池田輝政）

小利を見れば大事成らず（孔子）……四二六
古い鑵は早く熱する（英國俚諺）……四二七

九の廿三

九の廿四　（天野康景）

一無罪を殺すも仁に非ず（孟子）……四二八

九の廿五　（可兒吉長）

士は己れを知る者の爲めに死す（史記）……四三〇
十本の指が交もも彈くのは一つの拳が擊つのに如かぬ（西諺）……四三一

九の廿六

九の廿七　（淺野幸長）

性相近く習ひ相遠し（孔子）……四三三
吾れは女が如かずとするを與さん（孔子）……四三四

九の廿八

九の廿九

憂患に生きて安樂に死す（孟子）……四三五
義を見てせざるは勇なきなり（孔子）……四三七

九の三十

十の一　（富田知信）　事前に定まれば踏づかず（中庸）……四三九
十の二　（仙石秀久）　售らんかな售らんかな我は賈を待つ者なり（孔子）……四四一
十の三　（眞田昌幸）　已んぬるかな吾れ未だ能くその過ちを視て内に自ら訟むる者を見ず（孔子）……四四三
十の四　（前田利長）　過つては改むるに憚ること無れ（孔子）……四四五
十の五　三年父の道を改めざるは孝といふべし（孔子）……四四八
十の六　（後藤基次）　運命は勇を恐れて怯者を恐れしめる（セネカ）……四四九
十の七　虎穴に入らずんば虎子を獲ず（班超）……四五一
十の八　いふは易く行ふは難し（和諺）……四五三
十の九　丈夫の志たる窮しては當に益す堅かるべく老いては益す壯んなるべし（馬援）……四五五
十の十　稜々たる侠骨千古に高し（頼山陽）……四五五
十の十一　律義者の子澤山（和諺）……四五七
十の十二　（眞田幸村）　君子は坦かにして蕩々たり（孔子）……四五八
十の十三　生は寄なり死は歸なり（南淮子）……四五九
十の十四　君たること難く臣たること易からず（論語）……四六一
十の十五　（木村重成）　君子は泰かにして驕らず小人は驕りて泰かならず（孔子）……四六二

十の十六　禮を知らずんば以て立つことなし（孔子）……四六四
十の十七　花は櫻木人は武士（和諺）……四六五
十の十八　千金の子は盜賊に死せず（留侯論）……四六六
十の十九　（増田長盛）　始めあらざること莫し能く終りあるは鮮なし（中庸）四六八
十の二十　（徳川家康）　小人の學は耳より入りて口より出づ（荀子）……四七〇
十の廿一　成功は勇敢の子である（ピーコンスフキールド）……四七一
十の廿二　敵國外患なき者は國恒に亡ぶ（孟子）……四七二
十の廿三　たゞ仁者のみ能く人を好み能く人を惡む（孔子）……四七三
十の廿四　大怨を和すれば必らず餘怨あり（老子）……四七四
十の廿五　勝利に方つて自ら制する者は能く再度の勝利を得る（パブリアスサイラス）……四七六
十の廿六　大巧は拙きが若し（老子）……四七七
十の廿七　天下皆いふ我が道大にして不肖に似たりとそれたゞ大なり故に不肖に似たり若し……四七八
十の廿八　肖ならば久しその細なること（老子）
十の廿九　その知には及ぶべしその愚には及ぶべからず（孔子）四七九
十の三十　惡臭を惡むが如く好色を好むが如し（大學）……四八〇
十の卅一　禮を爲して敬せず（論語）……四八二
　　慌てる蟹は穴へ得入らぬ（和諺）……四八四

十一の十六　鷸蚌の爭ひは漁夫の利となる（戰國策）……五二一
十一の十七　釋迦に提婆（和諺）……五二三
十一の十八　人道は盈を惡みて謙を好む（易經）……五二四
十一の十九　志は滿すべからず樂みは極むべからず（禮記）……五二六
十一の二十　持ちてこれを盈ればその已むに如かず（老子）……五二七
十一の廿一　金玉堂に滿つれどもこれを能く守ること莫し（老子）五二八
十一の廿二（鍋島直茂）　小なる事は分別せよ大なる事は驚くべからず（德川光圀）……五三〇
十一の廿三　勢を以て交はる者は勢ひ傾けば則ち絕え利を以て交はる者は利窮まれば則ち散ず（文中子）……五三一
十一の廿四　博愛これを仁といふ（韓愈）……五三三
十一の廿五　善き事は眞似てもせよ（俚諺）……五三五
十一の廿六　人生を支配するものは運命である智慧ではない（シセロ）……五三六
十一の廿七（島津義弘）　強敵を伏せて勇士と知る（日蓮）……五三七
十一の廿八　驚直に進前せよ（佛光）……五三九
十一の廿九（直江兼續）　蠹くひ銹しさりうがちて窃む所の地に財を蓄ふること勿れ（基督）……五三一
十一の三十　道理は智者を支配し棒は愚者を支配する（英國俚諺）……五三二

十一の一　理を盡して行ひ勢ひを審かにして動し（西郷南洲）……四八七
十一の二　名譽は德に對する報酬である（シセロ）……四八八
十一の三　天下は天下の天下なり（六韜）……四八九
十一の四　仁者はその愛する所を以てその愛せざる所に及ぼす（孟子）……四九一
十一の五　天の視るは我が民の視るに自ふ（書經）……四九三
十一の六　備はらんことを一人に求むる勿れ（孔子）……四九五
十一の七　その政察々たればその民缺々たり（老子）……四九四
十一の八　大國を治むるは小鮮を烹るが如し（老子）……四九六
十一の九　石は破るべきなり而れども其の堅を奪ふべからず丹は磨すべきなり而れども……四九八
十一の十　その赤は奪ふべからず（呂氏春秋）
十一の十一　子路聞くことありて未だこれを行ふこと能はざればただ聞くことあらんを恐る（論語）……九九
十一の十二　志士は溝壑に在ることを忘れず勇士はその元を喪ふことを忘れず（孔子）……五〇二
十一の十三　儉なれば廣し（老子）……五〇三
十一の十四　群なるかな富める人哀しこの茕獨（詩經）……五〇四
十一の十五（本田正信）　泰山は土壤を讓らず故に能くその大を成す河海は細流を擇ばず故に能くその深きを成す（李斯）……五〇六
動かざること山の如し（孫子）……

十二の一　（安藤重信）

聖人はその身を後にして身先んず（老子）……五三七

十二の二　（上杉景勝）

小利を見れば大事成らず（孔子）……五三八

十二の三　（黒田長政）

烏集の交りは美なりと雖も親しまず（管子）……五四〇

十二の四　（板倉勝重）

良藥は口に苦くして病ひに利あり忠言は耳に逆うて行ひに利あり（孔子）……五四一

牝鷄は晨することなし牝鷄の晨には家の索くるなり（書經）……五四五

十二の五　（福島正則）

水至つて清ければ則ち魚なし人至つて察なれば從ふ者なし（禮記）……五四七

十二の六　（大久保忠隣）

分別は勘忍に在り（德川光圀）……五四九

十二の七　（藤堂高虎）

恩を知るは大悲の本なり（智度論）……五五一

十二の八　（加藤嘉明）

予は或ひは追放の刑に處せらるゝも知れぬけれど愉快に安んじて國を去るのを惡いとする道理はあるまい（エピクテタス）……五五三

十二の九　（大久保忠隣）

朝に恩を承けて暮に死を賜ふ（白易居）……五五四

十二の十　（藤堂高虎）

天を怨みず人を怨めず（孔子）……五五五

十二の十一　（加藤嘉明）

我れ容れらるゝこと久し（狄仁傑）……五五八

十二の十二　（大久保忠隣）

普天の下王臣に非ざるはなく率土の濱王土に非ざるはなし（詩經）……五六〇

十二の十三　（藤堂高虎）

人を玩べば德を喪ひ物を玩べば志を喪ふ（書經）……五六三

十二の十五　（德川秀忠）

民の仁に歸すること猶ほ水の下きに就き獸の壙に走るがごとし（孟子）……五六五

十二の十六　（伊達政宗）

樂んで憂へを忘れ老の將に至らんとするを知らず（孔子）……五六六

十二の十七　（大久保忠敎）

伯夷叔齊舊惡を念はず怨みこゝを以て希れなり（孔子）……五六八

十二の十八　（堀直寄）

人豈に自ら知らざらんや（石勒）……五六九

十二の十九　（細川忠興）

小勇は血氣の爲す所大勇は義理の發する所（朱熹）……五七〇

十二の二十　（毛利秀元）

無事なれば日月長く不羈なれば天地濶し（白居易）……五七二

十二の廿一　（眞田信幸）

人皆人に忍びざるの心あり（孟子）……五七三

十二の廿二　（大久保忠敎）

祝佗の佞ありて宋朝の美あらずんば難いかな今の世に免れんこと（孔子）……五七七

十二の廿三　（堀直寄）

能を以て不能に問ふ（曾子）……五七八

十二の廿四　（細川忠興）

生は死の始め（英獨俚諺）……五八〇

十二の廿五　（毛利秀元）

君子に三畏あり天命を畏れ大人を畏れ聖人の言を畏る（孔子）……五八二

十二の廿六　（眞田信幸）

己れに如かざる者を友とすること無かれ（孔子）……五八三

十二の廿七　（眞田信幸）

親しき仲には垣をせよ（和諺）……五八五

十二の廿八　（眞田信幸）

梅が香を櫻の花柳の枝になどと思ふまじきなり（松平樂翁）……五八六

十二の廿九（前田利常）財が集まれば人は衰へる（ゴールドスミス）……五八八
十二の三十　危きこと虎の尾を踏むが如く……五八九
十二の卅一　春の氷を渉るが如し（書經）
その智には及ぶべしその愚には及ぶべからず（孔子）五九一

目次終

一日一訓　偉人と修養

山田愛劍著

一の一　正直の頭に神宿る（和諺）

昔の武士は、嘘吐きといはれるのを、死に勝るの恥ぢとした。今の人は、世を欺き、人を偽はるのを、世渡り上手と感心する。世間、嘘吐きならぬ者はない。これでよささうなものであらうか。

太田道灌は、幼にして穎語、才智に任せて、人を欺くの風があつた。父資清は、これを憂へて、

『昔から、才智のある者には、偽りが多い。偽はる者は、大概、禍ひに

懼つて終る。人は正直でなけりやならぬ。障子を見よ。直なればこそ立つてをるが、曲れば忽ち、倒れるではないか。』と誡しめた。道灌は、唯々として退いたが、稍やあつて、屏風を持ち出して來て、

『父上、これなどは、直では立ちませぬ。如何なもので……』と問ひ返した。資清は、言葉もなくて、奥へ入つた。道灌、時に年十五。

世俗の諺にも、

人と屏風は、直ぐでは立たぬ。

といふが、これは間違つてゐる。屏風と雖も、曲つては立たぬ。下の疊に對して、眞直になつてゐればこそ、立つのである。

遮莫、人は、正直でなければならぬ。嘘僞りで世を渡り、世渡り上手と己惚れるなどは、以ての外である。今の人は、誠意のない上手が、結

局、下手に歸することを知らなければならぬ。

一の二　人生は朝露の如し　（漢書）

無常の世である。何一つ久しいものはない。「人生は、朝露の如し。」で、人の命からが、今日あつて明日ないものである。これも道灌幼時の事、父資清が、

驕者不レ久。

の四字を大書して、床にかけ、道灌を呼んで、

『あの意味が解るか。』といつて、暗に、道灌の驕傲を誡しめた。道灌は一見、

『解りました。然し、私は、あの脇へ、今五字だけ、書き添へたいと

思ひます。』と、筆を執つて、

不レ驕亦不レ久。

と大書した。資清は、非常に怒つて、扇で道灌を打つた。道灌は、驚いて逃げ去つた。

道灌の横着は、決して譽めた事ではないが、「驕らざるも亦た久しからず。」の一句は、不動の眞理を道破してゐる。

驕る平家は、久しからず。

といふが、驕らぬ源氏も、三代限りで亡びた。無常の世の中、何一つ久しいものはない。

而も、無常の世を無常の世と知り、何一つ、久しいもののないことを知る者は、名譽、財産、地位、官爵、さては命をさへ恃まない。何もの

のにも執着しない。死生存亡、毀譽褒貶、利害得喪、吉凶禍福、如何なる運命に會しても、少しも驚く所はない。

こゝに至つて、無常の世に棲みながら、その心持ちたる、常住の世に在るが如くである。

一の三　三界は皆苦なり國土も何の頼みかあらん　（仁王經）

商賣繁昌、まめ息災、家内の者も、何事もなく暮してゐる、といふやうな人は、他人の不幸を耳にすると、たゞ他人の事として、今日は人の上、明日は我が上であることを思はない。

『他人は失敗しやう。俺は大丈夫だ。他人は死なう。俺は、百年も千年も生きる。』といふやうな心得でゐる。自ら恃むの甚だしさ、たゞたゞ驚

くの外はない。

道灌の家來七人、何かの罪で、誅せられることになると、共々、或る屋敷に立て籠り、討手の五六百人を相手に、防戰これ努め、容易に屈服する樣子がなかつた。こゝに於て、道灌は、討手の者に使ひをやり、七人に聞えるやう、

『彼等の中に、助け置くべき者が、一人ある。その心得で、輕々しくは討ち取るな。』と、大音聲にいひふれさせた。

と同時に、手の利いた一人に命じて、屋敷に飛び入り、室内へ踏み込ませた。七人の者は、これに立ち向ひはしたが、

『この中、一人だけは助かる筈。その一人は、自分ぢやないか知ら?』

と、各自、そんな考へを起し、恃みにならない事を恃んで、打つ太刀も

控え勝ちであつた。斯くて、たつた一人の爲めに、七人共、手もなく討ち取られてしまつた。

古歌に

世の中に、一人止まる、ものならば、
若し我れかはと、身をや恃まん。

歌人の道灌は、この歌に鑑みる所があつて、然うした詭計を用ひたのであるとか。自分は助かる。討たれるのは、他人の事である。自分は無事。不幸に出遇ふは、他人に限ると、自ら恃むのが、人情の常である。而も、三界は、皆苦である。國土さへも、恃むに足らぬ。況んや五尺の一身をやである。

一の四　歳寒うして然る後ち松柏の後れて彫むことを知る　（孔子）

平素無事の際には、忠も不忠も、義も不義も、一列一帯の太平人で、その間、何の差別もないが、一朝、事變に會するに及んで、彼れは彼れ此れは此れと、各その本性を見はして來る。

例へば、上杉家の衰へた時、家臣の大部分は、相率ゐて小田原の北條氏康に歸したが、太田道灌、長野業正二人のみは、依然として志を變せず、よく憲政の爲めに力を盡した。

『今の世には、無双の名將ぢや。』と、南海、西海の涯迄も、嗟賞して措かなかつたといふ。

これ、主家の不幸が、圖らずも、道灌等をしてその忠臣たる所以を發揮せしむる機會となつたのである。孔子の語に、「歳寒うして、然る後ち、松柏の後れて彫むことを知る。」とあるのは、この事である。將た、古歌に、

深山木の、その梢とも、わかざりし、
櫻は花に、顯はれにけり。

とあるのは、この事である。

一の五　主將の法は務めて英雄の心を攬る　（三略）

如何なる英雄、如何なる偉人も、獨力、以て大事を成すには足らぬ。必らず、衆の心を攬り、これを腹心とし、これを股肱とすることが來出

て、然る後ち、驚天動地的の功業がある。衆の心を攬ること、これ、英雄、偉人の第一資格でなければならぬ。

昔し、北條早雲は、儒臣に命じて、有名なる兵書、黄石公の三略を讀ませ、「夫れ、主將の法は、務めて英雄の心を攬る。」の一句を聞くと、『自分は、最早、合點したぞ。他は、讀むに及ばぬ。』といつたとか。早雲が、羈旅の身を以て、相豆諸國を平定し、小田原五世の祖業を樹て得たのも、能く、衆の心を攬つたからである。

何として、衆の心を攬るか。方法ではない。手段ではない。才智を弄して、陰に人を籠絡したり、利益を供して、これを誘つたりするのは、衆の心を攬る所以ではない。以て、一時を欺くには足るが、永く人心を繋ぐことは出來ぬ。我れに一つの誠があり、純粹無染の同情を以て、相

手の爲めを思ひやる——たゞこれのみが、衆の心を攬り、死生、一に我が爲めにせしめ、依つて以て、大事業を成し得るのである。

一の六　陰德あれば必らず陽報あり　（列女傳）

何事にも、報酬の念がつき纏ふ。人に半錢を惠んでも、『斯うして置けば、他日、先方でも……』位ゐのことを思ふ。『あり難う！』の禮をいはせなければ承知しない。鎭守へ奉納の石の鳥居には、何某の名を彫りつける。學校への寄附金、品に對しては、感謝狀を要請する。少くも、

『俺は、善い事をした。』と、善人顏をし、內心に誇りを感ずる——世間滔々、皆これで、淺猿しいのは、小人の心である。

從つて、その善は、人前の善である。人の目につく時にのみ、善を行ふ。陰德を施すなどは、思ひも寄らぬ。

『陰で善い事をしたとて、譽めてくれる者もない。感謝する者もない。

椽の下の力持ち。

は、馬鹿者のする事だ。』とばかり、却つて、こそこそと惡事を行ふ。淺猿しいのは、小人の心である。

然り、それは、小人の心である。君子に至つては、少しも報酬の念がない。報酬といへば、善を行ふといふその事が、至上の幸福と心得て、陰日向なく善を行ふ。寧ろ、好んで陰德を施す。

遮莫、報酬を思はない善でなければ、眞實の善ではない。陰德でなければ、眞實の德ではない。早雲は、嘗つていつた、

『人は、陰の勤めといふ事が大切ぢや。』と、陰の勤めでなければ、眞實の勤めではない。それは、商人の善である。乃至、商人の勤めである。

而も、報酬を思はない善にこそ、結局、著るしい報酬がある。所謂る「陰德あれば、必らず陽報あり。」で、陰德、決して、陰德を以て終るものではない。聖書には、

汝等、人に見せん爲に、その義しきを人の前に行すことを慎しめ。然らずば、天に在す汝等の父より報賞を得じ……施濟をする時、右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ。如此するは、その施濟の隱れんが爲めなり。然らば、隱れたるに鑑給ふ汝の父は、明顯に報ひ給ふべし。

と見えてゐる。神の報ひは、然もあらばあれ、善く積まれた陰德は、

何時とはなしに、廣く世間に知れ渡り、感謝も來れば、名譽も來る。

諺に

惡事、千里に走り、好事、門を出でず。

といふが、好事、必らずしも門を出ないものではなく、惡事と同樣、千里に走るのが普通である。斯くして得られた報酬こそ、眞實の報酬である。報酬を思はない處にこそ、眞實の報酬があるのである。

一の七　齒は舌より堅くしてこれに先だちて破る　（淮南子）

鋭い刄物は、こぼれ易い。強い木は、折れ易い。齒のない老人の口にも、舌は、依然として殘つてゐる。これを思へば、剛强、剛强ならずして、柔弱、却つて剛强である。大慾、大慾ならずして、無慾、却つて大

慾である。

尼子經久、或る時、僧を召して、

『自分は、幼少の頃、「剛柔虛實」の四字を手習ひした。何の意味か。』と問うた。僧は、古人の說を引きなどして、講釋、詳細を極めた。經久は、打ち頷いて、

『否、そんな長談義は、覺えてをれぬ。たゞ、「剛は柔の終り、虛は實の本、と心得てよいか。』と問ひ、僧が、

『如何にも、相違はござりますまい。』と答へると、

『自分は、最早、合戰の道から、國を治める法に至る迄、この四字に盡きることを知つた。』といつて、非常に喜んだ。

大なるかな、「剛柔虛實」の四字！　以て、敵と戰ふに足り、以て、

國を治むるに足る。身を保ち、家を全うする位ゐは、何でもあるまい。慽むらくば、世人、この間の消息を解せず、妄りに剛強を用ひ、切りに大慾を主張して、その到底自殺的行爲に外ならぬことを知らぬ。

一の八　兄弟は十指の如し　（藤原惺窩）

兄弟、牆に鬩ぐの愚は、誰れも知つてゐる。誰れも知つて、誰れも兄弟喧嘩をする。兄も惡いが、弟も惡い。

兄は、弟を慈愛し、弟は、兄を尊敬す。　（藤原惺窩）

といふやうならば、世に兄弟喧嘩の種はあるまい。

武田信繁は、信玄の弟である。父信虎は、信玄を廢して、信繁に家を讓るの意があり、傳家の寶器を取つては、信繁に與へた。けれど、信

繁は、信玄に敬事して渝らず、それ等の品を、窃かに信玄に送り、決して私しなかつた。

信玄が、父を逐つて、自立した後は、益すこれを尊敬し、常に、『自分は、館の大恩を受けてをる。館の大事には、眞つ先かけて討死する覺悟ぢや。』といつてゐたが、果然、川中島の役に、八百人を以て、上杉謙信の三千人と戰ひ、世にも勇ましい討死を遂げた。時に、年三十八といふ。

その子を誡しめた條目の一二に、

屋形に對し、盡未來、逆意あるべからず。

屋形より、如何樣の御あてがひあるとも、述懷すべからず。

などあつた。敬愛の深き、想ふべしである。

であるから、信玄も、信繁を信じて疑はず、不和なるべき兄弟でありながら、圓滿を以て終始した。

兄の事は、姑らくいはぬ。弟として、兄を敬すること信繁の如くであるならば、同樣、圓滿を以て終始することが出來るであらう。豈に復た、兄弟喧嘩あらんやである。

一の九　和光同塵（和　諺）

智、甚はだよい。德、最もよい。その智、その德が、けばけばしく人の目につくのは、至つたものではない。縱し、人に見せやうとの野心があるわけではないにしても、一分の我意、若干の私心があるので、到底初心たるを免れぬ。

信繁が、その子を誡しめた條々の中に、

眞友たりとも、淫亂雜談、爲すべからず。若し、人耳しかけば、口立たざる樣にその座を立つべし。

「目立たざる樣にその座を起つべし。」——これがよい。多少でも、我意私心のある者ならば、目立たぬやうには振舞へぬ。甚だしきは、故意と他と異なつた樣子をして、善人ぶり、有德顏を見せる者さへある。

一の十　我れを知る者希れなれば則はち我れは貴し（老　子）

英雄、偉人の英雄、偉人たる所以は、凡眼には判らない。思想、言動すべて、行き方を異にしてゐる所から、凡人は、目して以て、迂とし、怠として笑はなければ、狂とし、奇として驚く。その眞の價値を定める

ことは、凡人には出來得ない。

といふのが、人は、その器量次第に、人を見るからである。門閥、財産、服裝、官位、稍や進んだ所でも、才智、手腕位ゐで人を見て、それ以上に及ぶことが出來ない。風采が堂々として、辯舌が爽か、といふやうなのを見ると、大人物でもあるやうに、三拜九拜、これを崇め奉る

——斯ういふわけである。

山本勘助晴幸は、近江の人である。兵を尾形某に學び、業成つて、仕へを諸國に求めたが、用ひらるゝに至らず、遂に、駿河へ來た。駿河の老臣等は、何れもこれを輕侮し、今川義元も、特に奇とはしなかつた。

斯くて勘助は、九年の久しき、駿河に在つて、寄食生活を續けた。板垣信形は、甲斐の長臣である。勘助の名を聞くと、これを主人武田信玄

に推薦した。信玄は、召し見てこれと語り、大に喜んで、即日、二百貫の地を與へ、名をも晴幸と賜うた。時に天文十二年。その十一月から十二月へかけ、僅か一個月の間に、信玄は、信濃の九城を略し、川中島の主村上義清を擊つて、これを走らせ、信濃全國を平定したが、それは、大半、勘助の功であつたといふ。

それ程の勘助が、久しく用ひられず、信玄を待つて、始めて驥足を伸し得た事、畢竟、その眞價が、凡眼には判らなかつたのである。赤手、猪を搏つて、右眼を傷つけ、一身、數十人と鬪つて、左足を傷つけ、爲めに、眇目に跛足となつた勘助は、凡眼の見る所、たゞの醜男、たゞの不具者に過ぎなかつたのである。

果して然らば、英雄、偉人が、凡人に知られないのは、その罪、專ら

凡人に在る。英雄たり、偉人たる者、憂ふるに足らぬ。寧ろ、凡人に知られないこと、即はち英雄、偉人の英雄、偉人たる所以であるとして、自ら安んずるがよい。「我れを知る者希れなれば、我れは貴し。」といつた老子は、又た

天下、皆謂ふ、我が道、大に不肖に似たりと。夫れ、唯だ大なり。故に、不肖に似たり。若し肖ならば、久し、その細なること。

ともいつてゐる。

所詮、人に知られるのは、決して悦ばしいことではない。取りも直さず、英雄でなく、偉人でない證據である。それは、却つて、悲しむべきに屬する。事に精神の修養に從ふ程の者は、この點、篤と思はなければならぬ。

一の十一　何によらず稚といふことを離れぬ間は物の成り上ることなきなり　（橋本左内）

子供の子供らしいのはよい。けれど、最早、十五六歳にもなれば、稚氣を去つて、内に一物の確乎たるものがあり、時宜次第、老成人と伍して、然迄はひけを取らないだけの、覺悟と實才を備へるのでなければならぬ。

今川義元は、書をその子氏眞に與へて、

『汝は、既に成長したけれど、今以て童心が失せず、雞を鬪はせたり、犬を走らせたりばかりして、文武の修行を餘事に附してをる。改めなければ、結局、國を亡し、家を失ふであらう。』と訓誡した。氏眞は、これ

を意とせず、果然、滅亡に及んだ。童心、稚氣、大差はあるまい。子供らしいのはよい。稚氣は困る。少年たる者、親たる者、宜しく義元の言に鑑むべきであらう。

一の十二　美しい行儀は美術中の美術である　（エマーソン）

野人、禮に嫻はずといへば、甚はだ男性的に聞えるが、爲めに隣人に不快の感を與へるなどは、決して賞めたことではない。

繪畫の美、詩歌の美が貴いならば、行儀の美も、より以上に貴いであらう。

三好長慶は、恭謹、端莊、曾つてだらけた樣子がなかつたといふ。連歌の席など、正座して動かず、殆んど屍の如くであつた。扇子を膝の

邊りに置き、暑さの堪へ難きに及んで、靜かに取揚げ、三四間開いて、音のせぬやうに扇ぎ、閉ぢて再び下に置くのに、その置き處が、前と疊の目一條も違はなかつた。相成るべくは、斯くありたい。

但し、この際、衒氣があつてはならぬ。人爲的であつてはならぬ。自然に然うあるのでなければ、氣障になり、可厭味になる。

一の十三　人君となりては仁に止まり人臣となりては敬に止まる　（大學）

人に長たる者の德は、寛容を以て第一とする。よく配下の過ちを容して、始めて配下の心服する所となり、その力を假りて、大事をも擧げることが出來る。

毛利元就の幼時、その傅が、元就を抱いて川を渡り、躓き溺れた。傅は、恐懼して罪を謝した。元就は、

『道を歩いて躓くのは、誰にもある事ぢや。心配には及ばぬ。』とのみ、夷然としてゐた。何等の寛容！　元就は、後ち、山陽、山陰、西海、南海に亘つて、十三州の主となり、名君を以て稱せられた人であるが、幼時、早く既に、その素質を見ることが出來たのである。

一の十四　君たるの道は必らず須らく先づ百姓を存すべし　（貞觀政要）

必らずしも、君たるの道とはいはない。凡そ、他人に對して、權力を有する者の弊は、その權力を妄用して、その人を侮り、これを虐げ、これを苦しめ、私心の無理を押通さうとするに在る。その結果、衆の心を失ひ、その地位を失ふ者の例は、官界、民間、到る處にこれを見る。最も戒しめなければならぬ。

既に中國平定の業を終へた元就は、諸將を國々に遣はさんとして、

『汝等、國に即いた上は、

その人を侮る者は、その土を有たず。

といふ語を忘れぬやう、よくよく、心がけよ。』と諭したとか。

善いかな、元就の言！　以て、一般、人に長たり、人に權力ある者を諭すに足らう。

一の十五　萬能利きの一心叶はず　（和諺）

多能は、結構である。書畫、彫刻、俳句、川柳、何でも出來るのは、人生の一樂事たるを失はない。要は、己れの本領を失はないに在る。世には、何でも出來て、何にも出來ない者がある。「萬能利きの一心叶はず。」は、萬能利かずの一心叶ひに如かぬ。孔子曰く、

君子、多ならんや。多ならざるなり。

と。眞に然り！

元就は、一技一藝の者と聞けば、召してこれを試みたが、自分では、決してそれに耽ることなく、常に左右に諭して、

『小技を好むな。』といつた。又た、

技藝嗜む勿れ。たゞ武略を講習して、遺失せざるべし。

と自書し、以て自ら誡しめた。

まことに、人、己れの本領を全うすることが出來れば、必らずしも、多能なるを要しない。

一の十六　力を以て人を服するは心の服するに非ざるなり　德を以て人を服するは中心悅んで誠に服するなり　（孟子）

權力は、以て人を服するに足る。心服は得られない。金力は、以て人を服するに足る。亦た、心服は得られない。

島根の陣に、元就の臣岩本源六郎道忠は、膝頭を射られたが、鏃が遺つて、久しく癒えず、遂に化膿した。醫者は、折開手術を勸めた。元就は、叱してこれを退け、自ら、口を以て疵口を吸つた。すると、膿と共

に鏃が出て、間もなく平癒した。

道忠は、感激、その極に達し、一死、元就の恩に報ひるの志を決した。元就は、それと看て取つて、

『これ位ゐの事を、厚恩と思ふやうなら、汝は、大勇の者ではないぞ。』

といひ、その輕擧を誡しめた。

權力も、力である。金力も、力である。けれど、人を心服し、これをして死をさへ決せしむるは、孟子の所謂る、德の力である。誠の力である。西郷南洲も、

天下後世迄も、信仰悅服せらるゝものは、たゞ一個の眞誠なり。

又た、

人に推すに、公平至誠を以てせよ。公誠ならざれば、英雄の心は、

決して攬られぬものなり。

といつてゐる。

一の十七　自ら恃め　（ヲ、フオンテーヌ）

眞の勇者は、他人を恃まない。而も、他人を恃まない程の勇者でなければ、身を以て衆を率ゐ、これをして、能く我が用を爲さしむるに足らぬ。即はち、他人を恃むに足らぬ。

元就が、門司の圍みを解いて退き、既に船へ上つた時、敵大友義鎭の家老瀧田民部が、後を追つて、たゞ一騎、波打ち際へ來た。毛利方の士浦宗勝は、それを見ると、單身、陸に上り、槍を合せて、結局、民部を突き伏せ、悠々として船へ戻つた。元就は、

『たゞ一人なら、浦兵部に相違ない。』といつたが、果して然うであつたといふ。以て、勇者の眞骨頭を了すべきである。

一の十八　お髭の塵を拂ふ　（和　諺）

世間滔々、おべつか使ひならぬはない。男子の行爲、お髭の塵を拂ふ位ゐ、醜いものはないが、拂はせて得意がつてゐるのも、滑稽である。彼れは、私慾が熾んなのである。此れは、自ら知らないのである。

元就の儒臣法橋惠齋といふが、元就に向つて、

『今日、殿の御威德は、中國を祓うて、百姓共は、湯武の世に遇うたやうぢやと、何れも悅んでをりまする。』との諛辭を呈した。元就は、苦り切つて、

『自分は、其方の言葉に依つて、殷の湯王、周の武王に及ばぬことを知つた。あの時代には、其方のやうな諛臣はなかつた筈ぢや。』といつて退けた。

元就は、流石に自ら知つてゐたのである。

一の十九　孟之反伐らず　（論　語）

功を功として誇る所の功には、限りがある。

『俺は、これだけの功を立てた。もう澤山だ。』とばかり、一段の努力を加へやうとはせぬ。斯くて、大功はあり得ない。論語に、

子曰く、孟之反、伐らず。奔りて殿す。將に門に入らんとし、その馬に策ちて曰く、敢へて後るゝに非ず。馬進まざるなり。

とあるが、この孟之反の如くでなければ、大功はあり得ない。

北條氏康は、氏綱の子、早雲の孫である。一生の勝利三十六度、身に七個所、面に二個所の創痕があり、時の人は、向創を「氏康創」といつて貴んだ。且つ、心を政治に用ひ、關東諸國、依つて安きを得たといへば、蓋し、希世の名主であつたのである。

或る時、甲斐の武田信玄と會見した。信玄は、武藏河越の役の戰略を問うた。氏康は、具さに語つて、

『然し、これ皆、左衞門太夫を始め、家來共の忠勇の致す所で、某の功ではござらぬ。』といつた。氏康が、功に誇らないことは、毎々、斯くの如くであつた。その風、善く下を化して、小田原の士民は、互ひに、寡慾、謙讓を以て相尙ぶに至つたとか。

而も、氏康が、功に誇らなかつたこと、これ、その能く大功を奏し、乃祖早雲の遺業を張大し得た所以である。些々たる功を功として、得意の鼻を蠢かす者の如きは、いふに足らぬ。

一の二十　吉凶禍福は己れのみ天に非ず　（家語）

吉凶禍福は、大部分、己れの招く所である。開明の今日、日の善惡、方角の良否などを氣にする者があるのには、驚き入る。

武田信玄は、智勇拔群の名將であつた。桔梗ヶ原の戰ひに、

『明日は、先負の凶日ぢや。敵は、信玄も、これを忌んで、かゝるまいと、油斷してをるに相違ない。』と、小笠原長時の不意を襲ひ、果して大捷を得た。

即はち、心がけ次第、凶日も吉日となり、吉日も凶日となる。慎みの凶日は即はち吉日、油斷の吉日は即はち凶日、と知つて、日の吉凶などに頓着しないがよい。

一の廿一　窮鼠猫を嚙む　（和蘭）

人と爭ふの際、これを打擊し、嘲笑し、侮辱して、逃るゝに道のない窮地に陷れるのは、甚はだ、痛快のやうであるが、動もすると、敵に決死の勇を與へ、「窮鼠、猫を嚙む。」底の擧に出でしむる虞れがある。多少の餘裕を存して爭ひ、多少の餘裕を存して攻める。この用意が必要である。

深澤の戰ひに、甲斐の兵が、小田原の長臣北條常陸介氏勝の黃八幡の

指物を拾つて來ると、人々は、

『隱れのない常陸介も、今度といふ今度は、指物を捨てゝ逃げた。』といつて、嘲り笑つた。

すると、信玄が聞いて、

『否、指し替への指物を、下人などが落して行つたのに相違ない。その詮索もなく、一概にひけとはいひ難い。』と制し、

『常陸介は、世にも名のある弓取りぢや。あやかつて譽れを取れ。』と、その指物を眞田源次郎信尹に與へた。

時に、小田原の家中でも、常陸介を謗る者があつたが、信玄の批判を聞いて、何れも、口を噤んでしまつた。氏勝は、やつと、窮地を脫れることが出來た。敵ながら、信玄知己の言に感じて、喜びの涙を流したと

か。

氏勝は、當時、隱れのない勇者であつた。若し、信玄の一言がなかつたならば、その恥辱を雪がんが爲めに、次回の戰ひには、どんな猛勇を奮ひ、どんな痛擊を武田方に加へたかも知れぬ。信玄は、こゝに見る所があつて、坐ながら、敵の鉾先を挫いたのである。

それは、兵家の策略であつた。これをして、敵を愛する雅懷、寬容に出でしめたならば、殆ど聖賢の意である。たゞ信玄が、敵と爭ふにも、餘裕を存するべく心がけた一事は、甚はだ學ぶに足るであらう。

一の廿二　民の事に從ふや常に幾んど成るに於てこれを破る　（老子）

何事も、九分通り出來上つた所で失敗する。油斷するからである。怠るからである。愼しまないからである。勢ひに乘じて、輕擧妄動するからである。

三方ヶ原の戰ひに、信玄は、既に大勝利を得た。諸將は、何れも、『この勢ひに乘じて、濱松を乘取りませう。』と勇み立つた。けれど、信玄は、

『信長の謀が、測りかねる。』といつて、軍を旋した。

果然、織田信長挾擊の計は破れた。

老子は又た、

終りを愼しむこと始めの如くなれば、敗事なし。

といつてゐる。年少血氣の輩は、特に、この點の戒心を要する。

一の廿三　能ある鷹は爪を隱す　（和諺）

故ら、能を隱すのではない。能を能としないのである。能を能とする者は、能に誇つて、油斷をする。能を能としない者は、彌が上にも、能を積まんとして、益す勉强する。能を隱す程の者でなければ、眞の能者ではない。

比田武右衞門といふが、仕へを求めて、武田家へやつて來た。武者奉行が、

『どんな武功を立てられたか。』と尋ねると、

『武功とてはござらぬ。』といつて、失敗談ばかりをする。武者奉行は、眞つ赤に怒つて、信玄の指揮を仰いだ。信玄は、

『器量の程が想ひやられる。』といつて、その儘、召し抱へた。果せるかな、戰ふ毎に武功あり、「鬼武右衞門」の名を成すに至つた。

諺にいふ、「能ある鷹は、爪を隱す。」と。この謂ひである。

一の廿四　商人利を重んじて別離を輕んず　（白樂天）

妻子、眷族との別離をさへ輕んずる。道義、道德が、何であらう。義理、人情が、何であらう。利の爲めには、一切を輕んじ、金の爲には、萬事を犧牲にして顧みざらんとする商人根性こそ、世にも忌はしきものゝ極みであらう。

而も、今の世は、商人全盛の世である。猫も杓子も、商人をあり難がり、知らず識らず、商人の感化を受けて、商人根性に墮してゐる。信

玄は、

『十四五歳の頃、商人と交つた者は、生涯、利心が失せぬ。』といつた。

單に交はつてさへ然うである。況んや、商人をあり難がるをやで、今の世、商人ならぬ學者なく、商人ならぬ政治家、宗教家、教育者、軍人、官公吏なき所以である。益す以て、商人全盛の世かな！

斯くいふのは、商人を賤しむのではない。商人根性を賤しむのである。廣い世の中、商人ならぬ學者、政治家のないに對して、商人ならぬ商人、即はち、商人根性を脱した商人があるならば、吾等は、その人を尊敬するに躊躇しないであらう。

一の廿五　己れに克ちて禮に復るを仁と爲す　（孔子）

「己れ」は、情慾である。「禮」は、道理と見てよい。道理に從へば、事を成し、情慾に從へば事を破る。情慾には從ひ易く、道理には從ひ難い。世に失敗者の多い所以である。

信玄の曰くに、

『人は、身を保つの法が、たゞ一つある。したい事をせず、したくない事をすれば、よく身を保つことが出來る。』とあつた。

「したい事」は、情慾の命令する所である。「したくない事」は、道理の指示する所である。人間、從ふ所を誤まつてはならぬ。乃はち、克己の二字がある。己れの情慾に打ち克つてのみ、人は、身を保ち、事を成すに堪へるのである。

一の廿六　果報寢て待て　（和、諺）

寢て待つて來る果報はないが、といつて、無理から致し得る果報もない。要は、己れの最善を盡して、成否の如何は、これを天命に打任せ、一切、干渉しないに在る。これを稱して、天命を知るといふ。

信玄は、天命を知つてゐた。その言に、

『多く國を取るのは、果報次第ぢや。けれど、果報は、知れぬものぢやから、先づ以て、末代迄も、弓箭の汚れのないやうと、愼しむに如くはない。斯くて、幸ひに壽を得れば、天下も、自然に目の前へ來るであらう。急いだ所で、春から秋へは飛越されぬ。妄りに大祿、大國を望み、不忠、不義を働く事、縱しその事が成らうとも、結局、非命の死を遂げる例は、古來、數多ある。實に怖るべきぢや。』とあつた。

左右、無理は通らないものである。

一の廿七　備はるを一人に求むる勿れ　（論語）

人には、能不能がある。短所を差し措き、長所に於て人を使へば、全然の廢人はないあでらう。

信玄の言葉に、

『澁柿を伐つて、繼木をするのは、小身の者の事ぢや。中以上の侍、殊に國持ちの人は、澁柿を澁柿として使つても、充分その用途がある。一切の仕置きが、すべて、この道理であらうか。』とあるもの、相違はない。

所が世人の多くは、この理を解せず、備はらんことを一人に求め、能不能、長短を見別けないで、人を用ひやうとする。使ふ者には不足があり、使はれる者に不平がある所以である。

一の廿八　利根に妙味なし鈍根に妙味あり　（僧澤庵）

利根の人は、解りが速い。從つて、事を輕斷し、若しくば、上滑りに墮するの失がある。鈍根の人は、解りが遲い。已むなく、思慮に思慮を加へる所から、早合點のないは勿論、何事も、深きに立ち入つて詮索するの得がある。

であるから、信玄はいつた、

『人は、少々鈍な者を仕込んだ方がよい。』と。確かに然うである。

遮莫、事物の道理は深い。利根の及ぶ所ではない。鼻先思案の徹見し得る所ではない。利根に己惚れて、思慮を怠り、才智に誇つて、學問を餘事に附するなどは、以ての外の不心得あでる。

一の廿九　鄕愿は德の賊なり　（孔子）

盲千人の世に在つて、多くの人に譽められる者は、大部分、孔子の所謂る鄕愿である。善にまれ、惡にまれ、迎合を事として、絕えて反對することがないから、人は、これを便利として、これに善人の名を與へるのである。これを善人とするならば、似て非なる善人である。

孔子は、似て非なる者を惡んだ。信玄も、似て非なる者を惡んだ、

『百人中の九十九人に譽められる者は、善人ではない。却つて、輕薄者

か、利巧者か、盜人か、佞人か、この四つの中を出ぬ。』といつた。

孔子、信玄ならぬ吾等も、似て非なる者を惡む。紫は、朱を奪ふ。

鄉愿は、德の賊である。惡まざるを得ぬ、厭はざるを得ぬ。

一の三十　十分は溢れる　（和讃）

無常の世の中、何事も、十分は宜しくない。月、盈つれば缺け、花、盛りなれば散る。登り詰めた山は、最早、下るの外はない。皆、同じ道理である。

信玄は、常にいつた、

『勝利は、五分を上とし、七分を中とし、十分を下とする。』と。そして

その理由を尋ねる者があると、

『五分は、勵みを生ずる。七分は、怠りを生ずる。十分は、驕りを生ずる。』と答へた。

所が、小人は、左右、十分を望む。儲けても儲けても、儲け足らず、尙ほも儲けて、世界中の金を獨り占めにしやうとかゝり、吝嗇漢よ。慾張り屋よと、世間の人から蔑しまれる。ちと省みたがよいであらう。

一の卅一　諸苦の因る所貪慾を本と爲す　（法華經）

昔の人は、貪慾を耻ぢとした。今の人は、何でも金持になればよい、成功すればよいとして、臆面もなく貪慾を行ふ。

永祿十一年十二月、信玄の攻擊に、駿河の今川氏眞は、遠州掛川へ出奔した。信玄は、左右を顧みて、

『疾く、今川の舘へ行つて、名物の寶物類を取つて來い。』と下知した。武田家四天王の一人馬場信房は、聞くと等しく、單騎、馳せ向ひ、舘に火をかけ、寶物諸共、燒き拂つてしまつた。寶物を奪ひ取つて、爲めに貪慾の師の嘲りを受けることを恐れての事と傳へられる。

今の人に聞かせたら、他事ながら、喉をぐびつかせるあでらう。

二の一　琴柱に膠（和　諺）

事には、往々、思はぬ故障がある。豫定通りには行かぬ。その場合、豫め、臨機應變の用意のない者は、周章狼狽の極、益す事を困難にする。然らざれば、强ひて、豫定の道に由らうとして、諺に所謂る、「琴柱に膠。」の愚に墮する。

信房はいつた、

『千變萬化ば、戰場の常ぢや。往々にして、手筈が違ふ。手筈の違ふ所は、違ふに任せて、善く働くのを、肝要とする。豫定が違つたからといつて、爲めに當惑し、狼狽すれば、大きな負けにもなり、穢ない首尾にもなる。』と。

これは、戰場の事であるが、平時の事が、やはり、これである。

二の二　人生は戰爭である　（カーライル）

「人生は、戰爭である。」――我々は、篤とこの事を會得しなければならぬ。何時、虎列刺、窒扶斯の彈丸が飛んで來て、この心臟を貫かうやら何時、地震、火事の强敵が襲つて來て、家、倉、諸財寶を掠めて行かうやら、判つたものではないと知れば、法外な慾心も起らないであらう。贅澤な考へも出ないであらう。寸分の油斷もないであらう。何んな災難に出遇はうとも、驚き騷ぐこともないであらう。僅かの智慧、才覺をあてにしたり、地位、財產を恃んだりする心も失せるであらう。

信房は、壁間高く、「戰場常在」の四字を掲げて、自ら誡しめたといふ。この心がけは、亦た、我々一般人の心がけでなくてはならぬ。

二の三　自慢高慢馬鹿の中　（和諺）

小人は、自慢したがる。自慢から油斷となり、油斷から失敗となる。

「自慢高慢、馬鹿の中。」でなくて何であらう。

或る人が、これも武田家四天王の一人なる山縣昌景に向つて、

『御邊は、何時の戰ひにも、曾つて後れを取られぬ。何か仔細があるのでござるか。』と尋ねると、昌景の答へに、

『凡そ、二三度も首尾よく行つた者は、何時もその通りと思ひ、自慢の心が先に立つて、工夫を等閑にする所から、意外の不覺を取る。自分は自慢の心とてなく、戰ふ毎に、初合戰の了簡でかゝるから、失敗せぬ。

朝暮、手に觸れ、腰に差す刀でさへ、油斷をすれば、銹がつくではないか。』とあつた。眞に然り！

二の四　道に聽いて塗に說くは德をこれ棄つるなり　（孔子）

讀んだだけ、學んだだけでは、宜しくない。讀んだ所、學んだ所が、充分、自分のものになつて、始めて、眞の學問である。

但し、自分のものになるとは、學問と自分とが、兩々、相融合して、區別がなくなる。即はち、學問が、自分の人格中に織り込まれて、人格の一要素となる。斯くて、自分の思ふ所、いふ所、行ふ所が、自然にして、學問の旨に叶ふ。乃はち、學問が自分のものになつたのである。

學問と自分とが、別々になつてゐる中は、まだ、眞の學問ではない。

昌景は、學問のない人であつたけれど、武事に練達してゐただけに、弓箭の事に就いて書いたものを見ると、學問自慢の人などの及ばない名文が多かつたといふ。

この話を聞いて、

『學問など、何になるものではない。何事も、經驗でなくては駄目だ。』などと、學問無用論を唱へるのは、早計に過ぎる。學問、決して無用ではない。道で聽いて塗で說く種類の學問、鼻先の學問は、成程、何にもならないであらう。けれど、他、別に眞の學問のあることを知らなければならぬ。

二の五　求めなきはこれ至貴足るを知るはこれ至

富心を安んずるはこれ至楽　（安藤省庵）

人、求むる所があれば、自ら苦しめ、人を欺き、種々の惡事を働く。求め、これ、萬害、萬惡の源である。

内藤昌豊は、やはり、武田信玄四天王の一人である。三枝勘解由左衞門守友といふが、

『他の家中では、自分の家來が、他の家來より劣つてをつても、優つてをるやうに申し立てまする。當家中ばかり、ありの儘に沙汰せらるゝこと、合點が參りませぬ。』と問ふと、昌豊は、

『劣るを優るとし、優るを劣るとするのは、町人や女の事ぢや。町人は賣らんが爲めに、花を飾り、女は、愛せられんが爲めに、自ら粧ふ。畢竟、輕薄の致す所ぢや。武士に在つては、最も嫌ふ。』と答へた。

雀は、餌を求めて騒ぎ、人は、名利を求めて騒ぐ。求めず、願はず、欲せず、望まず、貧に安んじて平然たるの、至貴、至富、至樂たるを知る者、庶幾くは、達人の名を享けるに足らう。

二の六　歳月は人を待たず　（陶淵明）

誰れにも志はある、望みはある。能くそれを達成し得る者は少く、十中の八九は、明日は、來年は、今に、今にといひながら、一生を終つてしまふ。

昌豊の談に、

『諸木の中、名のない木が、一本あつた。仲間を評して、杉よりは、檜が勝しぢや、などといふ。他の木が、貴公は何ぢや？　と尋ねると、自

分は、檜の上に明日ならう、といつたが、遂に何にもならなんだので、あすならうと名けたげな。』

人間にも、あすならうが多い。畢竟、志があり、望みがあつて、その志、その望みに相應する努力がないからである。歳月は、人を待たぬ。宜しく、時に及んで勉勵努力すべきである。

二の七　仁は勇を以てせず義は力を以てせず　（董公）

勇者は、衆を恃まない。衆を恃む者は、勇者ではない。

永祿二年二月、上杉謙信は、栃本城を援ふのに、黒木綿の胴服を着けた限り、甲冑も用ひず、十文字の槍を提げ、僅か二十三騎と共に、敵北條氏政の陣前を過ぎて、悠々として入城した。敵の兵等は、これを見て

『謙信は、夜叉羅刹の化身でもあるか。』と語り合ひ、誰れ一人、近づく者はなかつたとか。謙信の如くにして、勇者と稱され得るのである。

不正の勢力が跋扈して、世を亂し、人を虐げる今日、同志のない事を理由に、默して止むのは、勇者の事ではない。仁義、自ら任ずる者は、努めなければならぬ。

二の八　士の道義より大なるはなし　（吉田松陰）

士の道、義より大なるはなく、義は、君臣を以て、最も重しとする。我が國に在つては、殊に然うである。

謙信は、國を繼ぐの初め、彈正少弼に任ぜられ、從五位下に叙せられると、

『坐ながら官爵を受けるのは、人臣の義ではない。』といつて、翌天文二十二年二月、道を諸國に假り、僅かに二千八百人を引具して上洛し、先づ、闕に詣つて天恩を謝した。朝廷では、劒及び菊桐の章を賜うた。尋いで、將軍足利義輝に謁し、五月、歸國した。

無道の世に、謙信一人、この事があつたのは、奇特としなければならぬ。治世の我々も、甚はだ鑑むるに足るであらう。

二の九　死生命あり　（孔子）

死生は、天命である。妄りに危地に投ずるのは、勿論、譽めた事ではないが、妄りに死を恐れるのも、感心しない。彼れも、此れも、共に天命を知らないである。寧ろ、死生を餘事に附して、爲すべきを爲し、盡すべきを盡すに如かぬ。

而も、死生を餘事に附する中にこそ、却つて、安全の策があるのである。

永祿四年、謙信は、小田原を攻め、馬を蓮池迄乘り進めた。乃はち、辨當を取り寄せ、茶を飲む所を目かけて、城内から、鳥銃十挺ばかりを連ね、三繰り迄、擊ちかけたが、一丸も中らなかつた。謙信は、少しも騷がず、三碗迄茶を喫し、さて後ち、徐ろに退いた。

謙信は、死生を餘事に附して、而も、生命を全うした。これ、所謂理外の理か。

二の十　その爭ひや君子なり　（孔子）

爭ふのは、君子の事ではない。已むを得ずして爭ふならば、爭ふ中にも禮義があり、且つ、卑劣に亘らないやうにしたい。何でも勝てばよいとして、手段を擇ばずに爭ふ者は、その人、小人たるを免れぬ。

北條氏康、今川氏眞の二人相謀り、武田信玄の領國甲斐、信濃へ、鹽を送ることを禁じた。二國の士民は、非常に困却し、一種の兵粮攻めに異ならなかつた。斯くと聞いた謙信は、書を信玄に與へて、

聞く、氏康、氏眞、君を困しむるに鹽を以てすと。不勇不義なり。我れの公と爭ふ所は、弓箭に在りて、米鹽に在らず。請ふ、今より以往、鹽を我れに取れ。多寡は、唯だ命のまゝなり。（日本外史）

と告げ、商人に命じ、價を平かにして、これを供給した。立派な爭ひ方！

二の十一　信豚魚に及ぶ（易經）

「信義」と熟する。眞實、欺かないのが、信である。利害の爲めに去就を誤まらないのが、義である。信義の人は、味方は勿論、敵にさへ賴もしがられる。

元龜元年、北條氏康は、多年の仇敵なる謙信と和し、季子三郎を質とした。その意に謂へらく、

『武田信玄、織田信長は、反覆常なく、あてにはならぬ。今に於て、恃むべき者は、獨り謙信あるのみぢや。その信、その義、他に比がない。まことに、彼れの肌着を別けて、若い武將等の守り袋にさせたく思ふ。明日にも自分が果てた後ち、恃むべきは、彼れ謙信ぢや。』と。乃はち、

『氏政をも、御引き廻し、頼み入る。』といひ送つた。信義の人謙信は、敵にさへ頼もしがられたのである。信義なるかな！

二の十二　爾曹の敵を愛み爾曹を呟ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものの爲に祈禱せよ　（基督）

味方を愛する事は、誰れでもする。敵を愛するに及んで、眞に人を愛するものと稱し得やう。

天正元年四月、武田信玄は死んだ。北條氏政の報に依つて、それと知つた謙信は、折柄、心地よく食事をしてゐたが、箸を捨て、哺を吐いて、

『さてもさても、殘念な事をした。信玄こそは、實に英雄であつたのに……あゝ、關東の弓箭柱がなくなつた。惜しい事ぢや、惜しい事ぢや。』と、はらはらと落涙した。

因つて、三日間の音曲停止を令した。斯の如くであればよい。

二の十三　君子は人の美を成して人の惡を成さず小人はこれに反す　（孔子）

君子は、人に美名、美行があれば、これを譽め、これを助けて、その事を遂げしめやうとする。善を愛することが深いのである。若しくば、度量が廣いのである。

元龜三年四月、謙信は、武田信玄が、兵を三河へ出した事を聞くと、

直ちに信濃に侵入し、長沼を燒いて、遙かに德川家康に聲援した。これを見た信玄の子勝頼は、僅かに八百人を以て、出で拒んだ。謙信は、『流石、信玄の子程ある。彼れの勇を成すのぢや。』といつて、兵を引き揚げた。

これ亦た、人の美を成さうとしたのである。而も、敵に對して、この擧があつたのは、異常としてよい。たゞ、善を愛し、勇を好むの深いものは、この種の廣量があるべきである。

二の十四　大丈夫事を行ふ當に磊々落々日月の皎然たるが如くなるべし　（石勒）

男子の行爲、卑怯を嫌ひ、卑劣を忌む。卑劣中の卑劣は、人の弱味に

乘ずるのをそれとする。女のする事で、決して男子の行爲ではない。

が、今の世には、卑劣漢が多い。議員選擧の際など、何れの候補者もたゞ勝てばよいとの考へから、手段を擇ばず、卑怯を智とし、卑劣を賢として怪しまない。この輩、宜しく、謙信の事に鑑むべきであらう。

武田信玄の死んだ時、越後の老臣等は、謙信に向つて、切りに出兵を勸めた。けれど、謙信は、

『若年の勝頼の代變りを目がけて攻めるのは、甚はだ、男らしくない。』と斥けた。

尋いで、長篠の役に、勝頼が敗れた時にも、同樣、勸める者があつたが、謙信は、

『今、兵を出したら、信濃は勿論、甲斐迄も、此方のものぢやらう。け

れど、人の落目に乘じるのは、予の本意に背く。』とばかり、固く執つて動かなかつた。

たゞ勝てばよいとして、手段を擇ばないのは、戰國の諸將も、今の人と變らなかつた。然らば、謙信の擧は、古今を獨歩するものである。

因つて思ふに、信信は、利害に淡泊な人であつた。夙に禪を修めて、物に執着しないだけの修養を積んでゐた。然ればこそ、卑劣な手段を弄して迄、自ら利さうとはしなかつたのである。

これに對して、今の人は、利心が深い。慾に囚はれて、脱することを知らぬ。これ、卑怯、卑劣、如何なる手段をも擇ばない所以である。江村專齋曰く、

利を好めば、爲さゞる所なし。

と。今の人の事である。厭ふべし！

二の十五　兵強ければ則はち勝たず　（老子）

剛強一偏の勇者は、勇者の善き者ではない。柔弱を以て、剛強を制する者、これ、眞の勇者である。

例へば、高坂昌信の如き、武田四天王の一人として、武名隱れなく、強敵上杉謙信の押へとして、川中島に置かれた程の勇者であつたが、平生、我意を張ることなく、人を先にして、己れを後にし、一途に、主人信玄の爲めをのみ計つた。越後勢の鋭鋒に對するにも、勝つことを求めずして、柔かに受け留め、たゞたゞ、大合戰にならないやう、味方の討死の少いやうと、そればかりを心がけた。であるから、士卒の信望を得

て、川中島は、善く治まり、且つ、坐ながらにして、敵の鋒先を挫くことが出來た。

柔中、多くの勝算がある。剛強一偏は、捷ちを得る所以ではないのである。

二の十六　滿は損を招き謙は益を受く　（尙書）

一國でも、一家でも、繁榮、即はち、衰亡の原因である。繁榮は、驕慢を産み、油斷を産み、奢侈、佚遊、偸安、懶惰、さまざまの不德を産んで、最後には、衰亡を産む。その實例は、各國の歷史、これを示し、世間の實例、これを示す。

天正二年、武田勝賴は、兵を東美濃に出して、織田氏の十八城を拔き

甲府へ還つて、祝宴を張つた。その席上、昌信は、勝賴賜ふ所の盃を受け、立ちながら、傍らの長坂賴弘に向つて、

『これは、武田家滅亡のお盃でござる。』と放言した。賴弘は、眉を顰めて、

『謂れのない申され樣ではある。』と嗜めた。昌信は、屈しないで、

『否、御當家の滅びること、三年を出まい。それといふのが、今度のお手柄故でござる。』といつて除けた。蓋し、勝賴の今後益す驕慢なるべきを想ひ、これを諷諫したのである。

因つて思ふに、繁榮が惡いのではない。繁榮に次ぐ所の驕慢その他の諸不德が惡いのである。それ等の不德に陷ることがなければ、繁榮、必らずしも、衰亡の原因ではない。

二の十七　猿に冠（和諺）

冠を着けても、猿は猿、人間ではない。人間に似てゐる、といふ迄である。けれど、今の人は、冠に欺かれて、猿の猿たることを看破し得ず、却つて、眞實の人間——英雄、偉人を猿として賤しむ。

中國浪人井上新左衞門が、昌信への物語に、

『唐土では、身分の貴賤に關はらず、心の至つたのを、善い人と譽め、南蠻では、高價な小袖を着て、外見の美しいのを、善い人と申すとか。世間を見まするに、末になつた大名の家では、人の見方が、すべて、南蠻流でござりまする。』とあつた。

今の人も、南蠻流に人を見る。世が澆季になつたのであるとすれば、

これ、小事件ではない。

二の十八　らしくせよぶるべからず（和諺）

人は、己れの本領とする所に力を入れゝばよい。學者には學者の本領があり、政治家には政治家の本領があつて、軍人、官吏、教員、僧侶、皆、それぞれに本領がある。その本領を全くすることが出來れば、他は顧みるを要せぬ。他を顧みて、本領を忘れるなどは、以ての外である。

さて、己れの本領を全くするのが、即はち、らしくするのである。

行儀といふことに就いて、曾根内匠といふが、昌信に尋ねた。

『善い大將に、不行儀なのがあつて、惡い大將に、行儀の正しいのがあるのは、何うしたことでござりませう？』といふと、昌信は、

『これを譬へると、侍は、急用で家を出る時、扇子、鼻紙を忘れることはあつても、刀、脇差を忘れぬ。織田信長は、行儀は荒いけれど、大將としての心得があつて、善く家來を採り用ひる。扇子、鼻紙を忘れて刀、脇差を忘れぬ心ぢやから、善い大將と譽められる。大内義隆は、行儀は善かつたけれど、人を見る明がなく、結局、陶にやられて了つた。扇子、鼻紙を忘れずに、刀、脇差を忘れた形で、惡い大將と毀られる。先づ、そんなものでもあらうか。』と答へた。亦た、本領――らしくの說である。

學者の本領は、學理の研究に在つて、この本領を全うすることが出來れば、學者らしい學者である。金を溜めるに至らずして、年中、貧乏の捕虜になつてゐやうとも、譬へば、武士として、扇子、鼻紙を忘れても

刀、脇差を忘れぬ如くで、學者たるに於て、少しも耻づる所はない。憾むらくば、今の世、扇子、鼻紙を忘れずに、刀、脇差を忘れる學者、乃至、僧侶の多いことを。咄！

二の十九　朋友信あり（支那俚諺）

人は、朋友、知人から、賴もしがられるやうでなければならぬ。これを信義といふ。

山中鹿之助の母は、平生、鹿之助に敎へて、

『夜戰などの時、朋友を見殺しにせられるな。利のあつた時も、同樣ぢや。樂しい事があつたら、人と共に樂しまれよ。』といつた。要するに、信義の訓へである。

鹿之助は、この訓へを守り、深く自ら戒しめたので、朋友何れも、鹿之助を頼もしがり、喜んで配下に屬した。

所が、今の世には、不信の友が多い。朋友の難義を餘所に見て已むのは、信義がないのである。乃至、艱難を共にするが、安樂は、これを獨占して平然たるのは、信義がないのである。所謂る不信の友である。今の朋友と稱する者、大部分はこれである。甚はだ以て、頼もしくない。

二の二十　艱難に優る教育はない　（ビーコンスフキールド）

剛毅不屈、堅忍不拔の大精神は、たゞ艱難に依つてのみ與へられる。仁德や、才智や、亦た、艱難の賜ものである。まことに、「艱難に優る教育はない。」

鹿之助は、平生、神に祈るのに、

『何卒、七難八苦を併せ授け給へ。』といふを以てしたとか。世の神佛に祈る者を見るのに、十人が十人、幸福を祈る。鹿之助が、七難八苦を祈つたこと、これを普通の人情よりすれば、甚はだ狂人染みてゐる。が、「艱難に優る教育はない。」殊に若い時の艱難は、求めてもすべきものである。

熊澤蕃山の歌、

憂き事の、なほこの上に、積れかし。
限りある身の、力試しに。

は、一説に、鹿之助の歌ともいふ。

二の廿一　人一生の間に生れて白駒の隙を過くるが如し（魏徵）

人間、この世へ何の爲めに生れて來たか。それは判らない。けれど、空々寂々、無爲にして已むよりは、君國の爲め、同胞の爲め、社會の爲め、人類の爲めに、何等かの功業を建てゝ、短い一生を終つた方が、有意義のやうに思はれる。

まことに、短い一生である。志を功業に存する者、悠々閑々とはしてゐられない。

鹿之助は、毎月、三日月を拜しては、

『何卒、この三十日の間に、武勇の譽れを取らせ給へ。』と祈つたとか。

『この三十日」――隨分急いだわけであるが、實は、まだまだゆつくり過ぎる。今日直ぐからでありたい。短い一生である。明日を恃み得ない命である。宜しく、日々に一功あり、何時死んでも後悔のないやう、その一代が無意味に歸せぬやう、心がくべきである。幸ひに長命すれば、一日一功、一年三百六十功、終には大功業ともなるであらう。

若しそれ、

人生は、行樂せんのみ。富貴を待つ、何の時ぞ。（揚惲）

人生は、朝露の如し。何ぞ久しく自ら苦むること斯くの如くなる。

（漢書）

などいふに至つては、餘りに利己的とすべく、殆んど沙汰の限りである。似而非達人は、風敎の賊である。これを戒しめよ。

二の廿二　曠としてそれ谷の如し　（老子）

小人の小智は、小人にも判る。大人の大智は、大人のみが知る。これ小人が、智者として重寶がられるに反して、大人が、往々、愚人視せられ、倥侗者扱ひを受ける所以である。

竹中半兵衞重治は、初め、美濃の齋藤氏に仕へた。爲人沈勇、容易には鋒芒を露はさず、狀貌、亦た、婦人の如くであつた上に、武道を練磨するの外、小事を顧みなかつたので、齋藤の諸士等、重治の眞價を知る者はなく、

『あの男は、大名の總領などにはよからう。』などと笑ひ、主人龍興も、これを侮つて、無禮の擧が多かつた。近侍の者も、自然、主人を見習ひ

或る時など、櫓の上から、下を通る重治を目がけて、小便をしかけた。重治は、そつと押し拭つた限り、氣にかけない風で、その儘、屋敷へ引き返した。

が、流石に腹が立つ。遂に報復の意を決し、一夜、家來十餘人を引き具して、突如、城内へ斬つて入り、驚き騷ぐ番士等を、手當り次第に斬り伏せ、突き伏せた。龍興は、纔かに身を以て出奔した。重治は、一擧にして、城を乘つ取つた。永祿五年三月八日の事で、重治の年、時に十九歳であつた。

斯くと聞いた織田信長は、美濃半國を以て重治を誘ひ、切りに服屬を勸說した。けれど、重治は、

『自國の城を他國の人に與へ、その人から、所領を受けるなどは、思ひ

も寄らぬ。』と謝絶し、一年の後ち、城を龍興に返して、その身は、近江へ立ち退いた。

但し、後には、やはり、信長に仕へ、その臣秀吉に附せられて、智謀の名があつた。

重治が、齋藤主從から、愚人視され、倥侗者扱ひを受けたのは、大人の大智が、小人共には判らなかつたのである。重治は、大人であつた。その智は、大智であつた。大人の大人たり、大智の大智たる所以は、夜襲の事に於て、稍や明瞭した。後年に至つて、益す明瞭した。

遮莫、大人、大智は、常に、斯くの如きものである。小事には顯はれないが、大事には顯はれる。人を觀るの際、この點、最も三思の要がある。

二の廿三　人の過ちは各のその黨に於てす　（孔子）

何人も、その人相應の過ちをする。智者は、智者らしく過ち、仁者は仁者らしく過ち、勇者は、勇者らしく過つ。

重治の家で、軍物語のあつた時、重治の子の左京といつて、まだ幼少であつたのが、座を起つた。重治は、その復るを待つて、

『話半ばに、起つ法があるか。』と叱つた。左京は、

『はい、小便に起ちましたので……』と、辯解らしくいつた。重治は、きつとなつて、

『小便がしたくば、何故、この場でせぬか。竹中の子が、武道の話に聞き入つて、座敷を汚したといはれゝば、我家の面目ぢや。』と誡しめた。

過ちを見れば、人が解る。同じくば、立派に過ちたいものである。

二の廿四　解脱とは束縛を離るゝ義なり　（解脱道論）

客觀的にいつて、物に束縛されるのは、主觀的にいつて、物に執着するのである。物に執着するから、その物が束縛になる。

佛敎では、執着を嫌ふ。執着は、地獄の種である、といふ。死生存亡貴賤貧富、毀譽褒貶、利害得喪などの何物にも執着しなければ、何物にも束縛されず、物外に超然として、己れの天眞を樂しむことが出來る。

これを解脱といふ。解脱は、佛の境界である。

解脱に至るの道如何？　佛敎では、戒、定、慧の三つをそれとする。手取早くは、執着したくなるやうな物を持たないこと、これ亦た、解脱

の一道であらう。

黑田孝高は、平生、豐臣秀吉と親交があり、秀吉から、他日、知行を與ふべき旨の誓文を貰つてゐた。或る日、重治が訪ねて行くと、孝高は件の誓文の事をいひ出して、

『秀吉も、追々、出世をせられたが、とんと、約束を踐まれぬ。』と、不平を並べた。重治は、請うてその誓文を見、見畢ると、寸々に引き裂いて、火中に投じた。孝高は、一驚して、

『これ、何をせられる？』と、目を瞠つた。重治は、夷然として、

『この誓文があればこそ、不平も起り、怠りも出る。結局は、貴殿のお爲めにならぬ。』と答へた。

この言葉に、孝高も、已むなく納得して、爾來、大に勉强し、次第に

その身分を高くした。

重治の老婆心、孝高の爲めに、その執着の因を斷つたのである。孝高は、始めて誓文の束縛から脱れ、極樂暮しが出來るやうになつた。小人は、左右、高價な品などを買ひ求めて、我れから執着の因を作り、地獄の種を蒔く。憫れむべし！

二の廿五　危きこと累卵の如し　（史記）

古來、人生を戰爭に譬へる。地震、雷、火事、洪水の敵、病氣や、怪我や、その他種々の災難の敵が、到る處に伏在して、何時、襲ひかゝるやら、

一寸先は闇。（和諺）

まことに「危きこと累卵の如き」人間の運命である。これを思へば、成程、人生は戰爭である。

重治は、平生、諸士に語つて、

『武士は、自分の屋敷の雨落ちを出る時、最早、自分を窺ふ敵があると心得にやならぬ。』といつた。泰平の世に住む我々も、家居、外出、常に、自分を窺ふ災難の敵があると心得、これに處する用意のあることが肝要である。

用意如何？　敵のある者は、常に、討死の覺悟があるべきである。これ、所謂る用意である。

二の廿六　形を以て物の役と爲す　（陶淵明）

人は、往々、物に役せられる。物を使ふと稱して、その實、物に使はれる。

であるから、衣服、諸道具の類、すべて、高價な品を持つのは宜しくない。用が足ればよいとして、なるべく粗末な、安物を持つ。すれば、何時、火事で燒けても、盜人に取られても、壞しても、失つても、少しも未練がない。即ち、その物に使はれないで濟む。

重治の言に、

『身分不相應な馬は、買はぬものぢや。戰場で、好い敵を追ひ詰めて、飛び下りやうと思ふ時、槍を合せる爲に、飛び下りやうと思ふ時など、馬副ひの者が續かぬと、この馬、人の物になりはせぬか、再び得られる馬ではない、などの思案が出て、つひ機會を失ひ、馬の良いのが禍ひし

て、却つて、名を失ふことがある。十兩の馬を五兩の馬で辛抱すれば、時宜次第、乘り捨てゝも、惜し氣がない。さて後ち、殘る五兩で、又復馬を買へばよい。』といひ、

『馬に限らず、萬事に、この心がけが肝要ぢや。義のためには、命をさへ棄てる。況して、金銀、財寶如きは、塵芥とも思はぬがよい。それには、高價な品を持たぬことぢや。』とあつた。

世には、物に使はれて、義を失ひ、命を失ふ者が多い。孔子の語に、

巍々乎たり、舜、禹の天下を有つて與からざること。

とあつて、舜や禹は、天下にさへ未練をかけなかつたといふが、それは聖人の事、及びもつかぬ。凡人としては、なるべく粗末な物を持つことによつて、物の役とならないやうにするの外はない。

二の廿七　大丈夫當に屍を馬革に裹むべし安んぞ能く兒女の手に死なんや　（馬援）

人は、一生涯を通じて働くべきものである。獨樂の舞ひ倒れる如くに働き倒れるべきものである。

天正七年、重治は、豊臣秀吉を助けて、三木城を攻圍中、圖らず病氣に罹り、療養のため、一旦、京都へ歸つたが、醫者の言葉に、『最早、手遅れで、恢復は、覺束なく存ぜられまする。』とあると、『然やうか。それなら、軍中で死なう。』といつて、再び、播磨へ馳せ下り、同六月、平山で陣歿した。

獨り、武人のみではない。何人も、這般の覺悟を以て、己れの業務に

從ふべきである。働き又た働く中にのみ、人生の意味はあると知るがよい。

二の廿八　虱を捫りていひ傍らに人なきが若し　（晉書）

氣象豪邁の士は、人を見ること小兒の如くである。從つて、人の思惑世上の毀譽、古來の習慣などに拘束せらるゝことを肯ぜず、その言行、狂に近いのを常とする。

例へば、織田信長の如き、平生の形容、奇偉を極め、茶筌髪に結び、廣袖の衣に半袴を着け、腰の邊りに、燧袋、その他の品々を下げ、朱鞘の大小を帶し、外出毎に、他人の肩に倚り、餅を食ひながら歩くなど、傍若無人に振舞つた。見る者、聞く者は、

『信長は、天下無類の大呆氣だ。』と、嗤つたといふが、その實、氣象が豪邁で、世をも、人をも、眼中に置かなかつたのである。

三の一　人は見かけによらぬもの　（和諺）

善人に似た惡人もあれば、愚者に似た智者もある。倥侗に擬ふ豪傑もあれば、天才に近い狂人もある。まことに、「人は見かけによらぬもの。」である。

天文十八年、織田信秀が死ぬと、萬松寺にその法事が行はれた。長子信長は、次子信行と共に、これに詣でて、燒香をしたが、その樣子たる藁繩で卷いた長柄の刀、脇差を帶し、髮は茶筌に結び、袴も着けず、つかつかと位牌の前へ出て、抹香を大摑みにし、佛前へ投げて、席に復した。次いで出た弟信行の、正しい行儀に思ひ較べて、

『馬鹿のする事はよ。』と、見る者は、呆れ返つたが、たゞ一人、筑紫の

僧のみは、

『この人こそ、他日、一國の主となる人ぢや。』と感賞したとか。

重ねて、「人は見かけによらぬもの。」である。

三の二　善に遷りて過ちを改む　（周易）

向上の手段は、改過遷善の四字に盡きる。然るに、人が、過ちを改めないのは、何故か。悔ひることが淺いからである。善を好まないからである。勇氣がないからである。思ひ切りが惡いからである。斯くて、過ち又た過ちの間に一代を終ること、惜しむべきの至りである。

少壯時代の信長は、放肆、度なく、爲めに世間の嘲りを買つた。その傅平手中務大輔政秀は、深くこれを憂ひ、終に、諫書一封を留めて自殺

した。信長は、且つ驚き、且つ悼み、屏居數日、過ちを改むべきを誓ひ且つ、政秀の爲めに、一寺をその知行所志賀村に建立し、忌日毎に參拜した。政秀寺、これである。

戰場の勇者であつた信長は、過ちを改めるにも勇者であつた。これでなければならぬ。

三の三　樂は苦の種苦は樂の種　（和諺）

先づ苦しんで、後に樂しむ者は、智者である。先づ樂しんで、後に苦しむ者は、愚者である。

永祿四年、丹波の赤澤伊賀守から、信長の許へ、一羽の鷹を贈つて來た。信長は、篤くその厚情を謝する下から、

『拙者は、今日、正に、四方に事があつて、なかなか、放鷹などをしてをる暇がない。天下を一統して後ち、緩々頂戴しても、晩くはござるまい。』といつて、一先づ返戻した。

若き時、學ばぬ悔を、嚙み締むる、
奥齒なき迄、身は老ひにけり。

の古歌は、獨り、學問の事のみではない。信長同様、先づ苦しむの心がけがなければ、後に樂しむことは出來ぬ。

三の四　功成りて居らず　（老子）

勤勞に對して、報酬があり、勳功に對して、褒賞があるのは、當然の事であらう。それは、自然にあるのである。期待すべきものでも、要請すべきものでもない。報酬を期待し、褒賞を要請するやうな者に、大勤勞、大勳功のあり得た例しは、古往今來、嘗つてない所である。

信長が、近畿を平定し終つた時、朝廷では、その勳功を錄せられて、從四位下に叙し、左兵衞督に任ぜられた。けれど、信長は、

『臣は、たゞ、天の道に從つた迄でござりまする。今度の事は、決して臣の功ではござりませぬ。』と辭退した。因つて、改めて從五位下に叙し彈正忠に任ぜられた。

信長は、己れの勳功を勳功としなかつた。これ、その大勳功を奏し得た所以である。世には小勳功を大勳功とする者が多い。厭ふべし！

三の五　人を知らざることを患ふ　（孔子）

人を知らない者は、門閥を以て人を取り、閲歴を以て人を取り、貧富貴賤、服装、容貌等を以て人を取る。こゝに於てか、悪人を信用して、善人を排斥し、愚人を優遇して、賢人を疎外するなどの失敗がある。人を取るには、須らく人を以て取るべきである。如何せん、この事、凡人には能はない。たゞ、人を知る明のある者のみの爲し得る所である。

既に京畿を平げた信長は、留守の將一人を留めて、一先づ、岐阜へ歸ることになつた。京都の留守は、大役である。織田氏の宿將佐久間信盛柴田勝家、丹羽長秀等三人中の一人が、これに膺るであらうとは、衆評の一致する所であつたが、信長は、新參者の木下秀吉を登用した。人々は、意外の感をした。中には、嫉む者もあつて、種々、讒を構へ、秀吉を陷れやうとした。けれど、信長は、耳をも假さず、益す秀吉を寵任

した。

『人を使ふには、その能否をこそ問へ、新參、故參などは、論ずるに足らぬ。』といふのが、信長の持論であつたのである。

信長は、流石に人を知つてゐた。人を知るの明を具へてゐた。然ればこそ、專ら人を見て、新故などに拘はらず、賢能、秀吉の如きを擧げ用ひ、適材を適處に置いて、各その力量を盡さしめ、それに依つて、大事を成し得たのである。

而も、主從の間のみではない。凡そ、世に處し、人と交はる者は、人を知らなければならぬ。人を知つて後にこそ、これを語り、これに聽きこれと事を共にして、誤まることがないのである。

三の五　禮といひ禮といふ玉帛をいはんや　（孔子）

禮は、敬意を表する仕方である。慶吊に品物を贈答するのも、斯くして敬意を表せんとするので、苟くも、敬意を存し、且つ、これを表し得る以上、品物の多少などは、問ふを要せぬ。

天正十年、信長は、その臣明智光秀の弑する所となつた。その年の正月、大小名は、何れも織田家に伺候して、賀詞を述べ、禮錢を献じたがその禮錢、驚く勿れ、たつた十疋づつ！　而も、それは、信長の指圖に出た事といふ。信長は、善く禮の趣意を知つてゐたのである。

所が、今の人は、敬意を問はないで、品物を論じ、贈る者は、たゞたゞ、品物の立派ならんことを欲し、受くる者は、品物の如何によつて、

謝意を種々にする。何等の輕薄！

三の七　迹を踐まず亦た室に入らず　（孔子）

生れながらの善人は、第一、「迹を踐まず。」——特に道を學んだのでないから、古賢人の心術、言行を知らず、從つて、それに倣ふことが出來ない。第二、「室に入らず。」——道の一通りは知つてゐるが、奥底迄も知るに至らない。道に就いての考へが、淺薄である、といふ缺點がある。

であるから、平素無事の際には、善人で通るが、一朝、事があると、處置を誤まつたり、心が動搖したりして、甚はだあてにならない。

こゝに於てか、精神修養の必要がある。あてになる善人は、生れなが

らの善人ではなく、修養の善人でなければならぬ。

信長は、

『嗜みの武勇は、生れながらの武勇に優る。』といつた。「嗜み」は、修養の意であらう。生れながらの善人が、あてにならない如く、生れながらの勇士も、あてにならない。勇士と善人と、その品は違ふけれど、修養の功を積んでのみ、眞の勇士、眞の善人になり得る事に變りはない。

であるから、人は、修養しなければならぬ。

『俺は、生れながらの善人だ。特に修養する必要はない。書物を讀むのは、餘計な骨折りだ。』などと、己惚れてゐる者は、よくよく、鑑むべきである。

三の八　好んで小慧を行ふ　（孔子）

才子はよい。その才は、須らく、大才でなければならぬ。小才では困る。孔子は、好んで小才を行ふのを、小人の事とした。

森蘭丸は、森可成の子である。信長に仕へて、殊寵を受けた。十二三歳の頃でもあつたか、或る僧が、信長へ目見えの時、禮物として、蜜柑を献じた。蘭丸は、その由、信長に披露し、且つ、その蜜柑を運びにかゝつた。信長は、

『其方の力では、覺束ない。倒れるぞ。』と注意した。蘭丸は、果して倒れ、臺を壞し、蜜柑を座敷中へ蒔き散らした。信長は、

『それ見よ。』と大笑ひした。

後日、人があつて、この事をいひ出すと、蘭丸は、

『否、あれは、故意と倒れたのでござる。無事に運び終せたら、殿のお目利きが違ひ申す。主人に目利き違ひをさせるのは、何事によらず、宜しくござらぬ。』といつたので、聞く者は、何れも感心したとか。

けれど、吾等は、感心しない。蘭丸が、餘程の才子であつたことに論はないが、その才たる、到底、小才たるを免れぬ。斯くして、主人を喜ばせ、その驩心を買はうといふ、それ程の野心はなかつたにしても、左に右、正直を缺いてゐた。主人を欺いたといふことにもなる。蘭丸の才をして、これ等に止まらしめたならば、孔子の所謂る、「好んで小慧を行ふ」者で、小才子に過ぎなかつたのである。

而も、何時の世にも、この種の小才子が、利巧者として貴ばれる。大

才子の出ない所以である。

三の九　命を知る者は巖牆の下に立たず　（孟子）

心を竭し、手を盡して、尙ほ且つ懼る災難は、人力の及ばない所である。人力の及ばない所であるから、天命といふ。不用意に、輕卒に事をして、禍ひを受け、以て天命に歸するのは、未だ天命を知らないのである。

信長、或る時、放鷹に出て、一農家へ入ると、偶ま、地震がやつて來た。供の者は、皆、驚いて逃げ出したが、信長は、神色常の如く、自若として動かず、靜まるのを待つて、始めて戸外へ出た。始終、側らに在つた蘭丸は、

『大切な御身を以て、斯かる小事の爲めに、危きをお避けなさらぬこと如何かと存じまする。』と言上した。信長は、

『道理ぢや。』と頷き、その言を嘉納した。

蘭丸は、流石に、天命を知つてゐたのである。

三の十　思ひ内にあれば色外に見はる　（和諺）

心身の間に、密接な關係のあることは、心理學者の說を待たぬ。人はその思ふ所、感ずる所を、言語に見はす前に、擧動に見はし、顏色に見はして、少しも蔽ふ所がない。

本能寺の變のある前、蘭丸は、窃かに信長の前へ出て、

『明智光秀は、食事の際、飯を嚙まずに嚥み込んだり、箸を落して、たぶんやりしてをつたり、何か企みがある樣子でございまする。きつと一大事でございませう。御油斷は成りませぬ。』と注意した。けれど、信長は、以て讒として信じなかつた。果せるかな、長子信忠共々、光秀の弑に遇つた。

であるから、大學には、「獨りを愼しむ」の說がある。所謂る「獨り」は、心を指す。

三の十一　約束上手の行ひ下手　（和諺）

「行ひ下手」であるから、「約束上手」である。最初から、實行の誠意がない。それ故、どんな約束でも出來るのである。

今の時代は、嘘吐き時代である。互ひに嘘を吐き合つてゐるから、違

約者となることを、誰れも恥ぢとは思はない。他人の違約を責める資格のある者もない。違約されても、然迄は怒らない。「お互ひ様」位ゐに思つてゐる。斯くて、今の人は、すべて、「約束上手の行ひ下手」である。

これに較べると、古今は、約束を重んじた。例へば明智光秀の如き、その主織田信長を弑した事に依つて、世に逆臣の名のある人であるが、約束を重んずる一事に於ては、遠く今の人に優つてゐた。三河牛窪の牧野右近大夫の家に在つた時、光秀の知行は、僅かに百石程であつた。而も、大志を藏めた光秀は、或る日、同僚の中野某に語つて、

『侍の身は、何時、どんな事になるやら、知れぬものぢや。萬一、吾等が、一城の主となつた曉は、貴殿を迎へて、城代としやう。貴殿が

出世せられたら、同様、御採用に預りたい。』と約束した。

後ち、光秀は、信長に事へて、次第に地位を進め、丹波を賜はり、こゝに一城の主となつた。乃はち、中野を呼び寄せて、龜山の城代とし、以て、往年の約束を履行した。何等の佳話！

遮莫、約束を重んずること光秀の如くであるならば、「約束上手」にならない代りに、「行ひ下手」にもならないであらう。以て、嘘吐き時代の人の反省資料とする。

三の十二　吾れ試ひられず故に藝あり　（孔子）

富貴の子は、飽食、煖衣、遊ぶことを知つて、世に立つ術を知らぬ。殊に、實用の藝能の如きは、その全然缺如せる所である。有爲の材が、

常に、貧賤の出であることは、歴史、これを證し、世間、これを證して露、疑ふべくもない。

光秀は、元と美濃の人である。多年、貧賤の地に在つて、畿内を始め北陸、東山、東海、山陽、西海、南海を浪遊すること六個年、具さに困苦を嘗めつゝ、諸國の風土、家々の法式、その家を興し、地を拓くに至つた次第から、各地に於ける武功の士の姓名、事蹟に及んで、細々に調査し、これを日記に書き留めて、以て、己れの考據に備へた。

光秀の才智、藝能は、當時、他に双ぶ者がなかつた。織田信長が、淺井、朝倉、三好の諸家を亡したのは、光秀の献策に依るもの多く、安土の城も、光秀を奉行とし、その知る所の古實に法つて、これを築いた。光秀が、人に問はれて、坂上田村麻呂から信長に至る迄、我が國古來の

名將を數へ擧げると、信長が聞いて、『自分を加へたのは、片腹痛い。然か申す光秀こそ、天下無双の名將ぢや。』といつたとか。而も、光秀の然うした才智、藝能は、貧賤の際に於て研磨されたのである。その昔し、浪人であた幾年かの間に、修得されたのである。孔子曰く、「吾れ、試ひられず。故に藝あり。」と。亦た、光秀の事である。

果して然らば、秀賤は、患ふるに足らぬ。心がけ次第、これを機會とし、これを師友として、能く、有用の才藝を修得し、他日雄飛の素地を成すことが出來るのである。

三の十三　糟糠の妻は堂より下さず　（宋弘）

貧賤の日、艱苦を共にした糟糠の妻は、堂より下さない位ゐに、大切にすべきで、これ、人情である。功成り、富貴を得るに及んで、忽ち昔を忘れてしまひ、妻を放つて置いて、自分一人、勝手の眞似をするなどは、人情に背き、義理に反する。不德の甚だしいものである。

光秀が、貧賤でゐた頃、同僚相約し、輪番に請待し合つて、話をする事があつた。光秀の番になると、朝夕にも困る中から、他人を招いて饗應するなどは、思ひも寄らなかつたが、妻は、他家以上に、立派の食事を調へて、一同に侑めた。光秀は、不思議に思つて、

『何うした事？……』と尋ねると、妻の答へに、

『髪を剪つて、町へ賣りに行き、酒の料に致しました。』との事である。

光秀は、感激措かず、この上は、何とか成功して、妻の好意にも報ひな

ければならぬと、單身、家を出で、初め、細川藤孝に仕へ、後ち、織田信長に仕へて、漸く立身の運に向つた。乃はち、妻を呼び迎へて、優遇の限りを盡し、その歿した時には、自身、これを葬送して、聊か、往日の好意に報ひたとの事である。

光秀の妻が、髪を鬻いで、良人を恥辱から救つた健氣さは、千古、婦人の鑑である。光秀が、これに報ひんが爲めに、自ら勵まし、立身の後ち、この糟糠の妻を優遇して、その死に及ぶ迄渝らなかつた一事、亦た世の輕薄男子を戒しむるに足る。今の所謂る成功者中、光秀に恥ぢない者が幾人あるか。

三の十四　人間萬事塞翁が馬　（和　諺）

幸福、喜ぶに足らぬ。大概、不幸の種となる。不幸、憂るを要せぬ。往々、幸福の因となる。まことに「人間萬事塞翁が馬」である。

光秀が、細川藤孝に仕へた時には、知行僅かに八十石、而も石田であつたので、老臣米田宗鑑に、

『今少し、良い地とお代へ下されよ。』と請うた。けれど、宗鑑は、許さなかつた。光秀は、怒つて細川家を去り、後ち、織田信長に仕へ、功を以て丹波を與へられ、且つ、信長の優命に依つて、その三女を舊主藤孝の嗣子忠興に嫁せしむる迄に立身した。

斯くて、初めて忠興の邸に臨んだ時、光秀は、

『宗鑑に對面したい。』といひ出した。昔の事がある。宗鑑が、少からず迷惑がると、光秀の曰くに、

『あの時、其方が、予の望みを叶へて呉れた位ゐなら、自分は、依然、細川の家に留まつたであらう。予が、これ程の身分になつたのは、細川を去つて、織田公に仕へたからで、細川を去つたのは、其方が、予の望みを斥けたからぢや。それを思へば、其方は、予に取つて、福神ぢや。』

とあつたので、宗鑑は、やつと落ちついた。

即はち、不幸が、幸福の因となつたのである。

然るに、光秀は、後ち、逆臣の惡名を受け、家を失ひ、身を亡すに至つた。信長に仕へなかつたら、そんな事にはならなかつたであらう。これ、幸福が不幸の種となつたのである。

禍福、幸不幸の轉變常なきことは、斯くの如くである。あてにはならぬ。恃むには足らぬ。寧ろ、禍福、幸不幸を度外に置き、塵外に超然た

るのが、即はち、達人の態度であらう。

三の十五　徳孤ならず必らず隣あり　（孔子）

徳は、力である。以て、人を化するに足つて、必らず、これに類従する者が出來る。少くも、人を心服させずに措かぬ。

光秀は、既に、その主信長父子を襲殺すると、三宅秀朝を擧げて京都守護職とし、京中の地子錢を免ずるを始め、善政を布き、法令を正し、専心、市民の福利を計つたので、人々これを徳とし、その亡びた後は、七月の盂蘭盆會中、戸毎に提灯を點じて、これが冥福を祈つたといふ。

光秀が、主人父子を弑したには、種々、恕すべき理由があつたであらう。吾等は、

心知らぬ、人は何とも、いはゞいへ。

身をも惜しまじ、名をも惜しまじ。

と憤つて、彼の暴擧に出た光秀の志を憐れむ。光秀、決して、惡人ではなかつたのである。寧ろ、智、仁、勇兼備の名將であつたのである。たゞ、信長の待遇が、極度に過酷であつたに對して、光秀の忍耐力は、幾分、及ばない所があつた。將た、明哲保身の術に暗かつた。これ亦た、その正直を見るべきで、大逆の事は、惡むべきであるが、こゝに至つた心情には、恕すべく、憐れむべきものがあつたのである。

が、左に右、大逆である。大逆の罪は、天地の容れざる所である。そこに何等の理由があらうとも、到底、惡人たるを免れぬ。而も、京師の人が、その惡人たることを思はないで、却つてこれに同情し、爲めに冥

福を祈るの擧に出たのは、深く、その德に感激し、心服したればこそである。

惡人の德も、尙ほ且つ、人を心服せしめる。況んや善人の德をやである。德は、力である、絕大の力である。

三の十六　士は己れを知る者の爲めに死す　（史記）

士は、己れを知る者の爲めに死ぬ。事の成否、身の利害、世の批判、人の思惑などは、必らずしも、問ふ所ではない。

明智光春は、光秀の從弟である。初め、三宅彌平次と稱し、後ち、明知の姓に復して、左馬助といつた。本能寺の變に、並河金右衞門が、織田信長の首を獲ると、

『武田氏の亡びた時、右府は、勝頼の首を罵詈せられた。今尙ほ、人の謗りが絕えぬ。今、主人が、右府の首を見られたら、積憤の餘り、同樣辱めを與へられるも知れぬ。後代の非難は如何？　天命の程も恐ろしい。匿すに如かぬ。』といつて、僧西譽に命じ、懇ろに取り斂めさせた。

光春は、光秀の弑逆に與して、而も、その惡名を得んことを恐れた。その心を推すに、出來得べくは、光秀を諫めて、思ひ止まらせたかつたのである。たゞ、事の濟ふべからざるを思ひ、一死、以て、光秀の知己に報ひんとしたのに相違はない。事の惡むべきは然ることながら、情は則はち、憐れまざるを得ぬ。

さはれ、士が己れを知る者の爲めに死ぬのは、情であつて、理ではない。願はくば、情と理とを兼ね備へて、道に背くに至らざらんことを。

光春の所行には、この點に於て、議すべきものがあるらしい。士たる者思はなければならぬ。

三の十七　生は寄なり死は歸なり　（淮南子）

死なぬ筈の者が死ぬのではなくて、死ぬ筈の者が死ぬのである。人の死ぬこと、何の不思議があらう。驚くに足らぬ。悲しむに足らぬ。死期に臨んで、惶れ惑ひ、常の態度を失ふなどは、沒分曉の甚だしいものであるが、世間、沒分曉漢でない者は殆んどない。

本能寺に信長を弑した明智光秀は、更に安土城を取つて、光春を置きその身は、秀吉と戰ふべく山崎に向つた。光春は、

『自分を金の番人とは……』と、呟いてゐたが、山崎の事が、氣にかゝ

る所から、安土を發して京に向ふ途中、味方の敗戰を耳にした。乃はち坂本の城に入らうとしたが、陸上は、既に、秀吉の軍に塞がれて、進むことが出來ぬ。進退、こゝに谷まつた光春は、大津の邊りで、淘然とばかり、馬を湖水へ乘り入れた。秀吉の兵等は、

『今に溺れるぞ。』と笑ひながら、汀に立つて見守つた。けれど、光春には覺えがある。乘る所は、大鹿毛と呼ぶ名馬である。難なく唐崎へと乘り上げた。

さて、一つ松の下で、馬に息合の藥を與へ、更に坂本に向ひ、十王堂の前迄來ると、馬を堂の柱に繫ぎ、矢立を取り出して、

明智左馬助光春、湖水を渡せし馬なり。

と札に記し、鬣に結びつけて置いて、その儘、坂本へ入城した。

秀吉は、その馬を取つて、曙と名け、賤ケ嶽の戰ひには、大垣から二十里餘りの惡路を乘り切つたといふ。

光春は、刀折れ、矢盡き、復た如何ともすべからざるに及んで、尙ほ能く、悠々として迫らず、最も閑靜に振舞つた。死生の理に通曉してゐたのであらう。この話、以て、世の沒分曉漢に薦める。

三の十八　花は櫻木人は武士　（和　諺）

人間、皆死ぬ、如何に死ぬかは、平素の心がけに在る。同じ死ぬならば醜くないやう、櫻の花の散り際の潔いやうに死にたいものである。

光秀は、山崎に敗れた。斯くと聞いた光春は、急ぎ、坂本の城に入り光秀の妻子を天主に迎へ、城内、ある所の寶物を取り纏めて、唐織の肩

衣に包み、

『自分と共に、天下の重器が失はれるのは、無益の事ぢや。よつて、目錄相添へ、進上に及ぶ。』といつて、天主から吊り下げた。折柄攻め寄せた敵羽柴秀吉の軍に贈り、大音に、

『今夜中に、城内の掃除を終つて、明朝、切腹の覺悟でござる。今日城攻めの儀は、御猶豫を願ふ。』と呼はつた。この言葉に、寄手は、少しく退いた。

乃はち、掃除を終つて後ち、曉頃、先づ、女子供を刺し殺し、その身は、火をかけて自殺した。

何といふ潔さであらう！　そこには、少しも、自暴自棄らしい樣子がない。猛暴に亘る擧動もない。といつて、未練もなければ、執着もな

く、譬へば、櫻の花の散り際の潔い如くに潔い。人間、皆死ぬ。同じ死ぬなら、光春の如くに死にたいものである。

三の十九　人生は朝露の如し何ぞ久しく自ら苦しむること此くの如くなる　（漢書）

功名に意のある者は、或ひは官吏となり、或ひは軍人となり、正從何位、勳何等、功何級、運好くば、華族の榮爵を贏ち得んとして、自ら苦しめること幾何なるを知らぬ。而も、功名は得難く、富貴は空想に終つて、自ら苦しめるに終る場合が多い。それが、單に功名心の爲たるに止まつて、君國の爲め、同胞の爲めなどいふ、聖大な考へがあつての事でない以上、寧ろ、野に退いて、一家の無事、一身の安泰を圖るに如かぬ

「人生は、朝露の如し。」功名が何であらう、富貴が、何であらう。

光春が、難なく琵琶湖を渡り終せて、坂本の城に入り、羽柴秀吉の軍に取り圍まれ、四面楚歌の間に、一死を潔くせんとする折柄、夜陰に乘じて、大手の門に案内を請ふ者があつた。その名を問へば、

『拙者は、入江長兵衞尉と申す者。左馬助殿に對面致したい。』といふ。

これ、光春の舊友である。光春は、櫓の上からこれに逢ひ、

『吾等の命も、今宵限りでござる。末期の一言、篤と聞かれたい。』

『何事でござる？』

『吾等が、若年の頃より戰場に出で、或る時は先手となり、或る時は殿りを勤め、具さに艱苦を嘗めたること、皆これ、子孫の後榮を期したのでござる。けれど、天命が縮まれば、今日のこの身の上ぢや。功名富貴

も、今は夢となり申した。貴殿として、こんな事になられやうも知れぬ成るべくば、仕へを罷めて、危險に遠ざかり、身の安穩を計られよ。今この金を貴殿に進じる。これを恒産にせられよ。』といつて、三百匣入りの革袋を投げ與へた。

長兵衛は、深く光春の言に感じ、戰後、致仕して京都に引き籠り、右の三百兩から、漸く貨殖し、富榮の間に一生を終つた、と聞く。

官に仕へて、功名富貴を計るのも、一身の爲めである。野に退いて、貨殖にこれ努めるのも、一身の爲めである。等しく一身の爲めにする事ならば、彼れには束縛があり、此れには自由がある。彼れには危險があり、此れには安穩がある。此れをするのは、彼れをするに優る。まことに、

すまじきものは宮仕へ　（和諺）

である。

貨殖に努めるのは、俗人の事で、勇士の屑しとしない所であらう。

然らば、

一竿の風月、南湖に老ゆ。（陸游）

の風流も、亦た、心の儘なるに於てをや！

三の二十　小人は心思外に向ひて人前を慎しむのみ　（熊澤蕃山）

小人は、たゞ人前をのみ慎しむ。行ひに表裏がある。外聞、利害を憂ふるが爲めに、惡事をしない迄で、内心、善を念ふわけではないのである。内心、善を念ふ者は、人前と否とに論なく、行ふべきを行ふ。

細川忠興が、岳父明智光秀を訪うた時、一人の小姓があつて、障子の外の椽側を通るのに、手を突き、慇懃に拜伏して通り、恰かも、その人の目前に於けるが如くであつた。忠興は、

『さてさて、律義な者ではござりまする。』と感心した。光秀は、

『それは、多分、三宅彌平次といふ者でござらう。』と答へた。忠興は、彌平次を召して、種々、褒美の言葉を傳へた。

即はち、彌平次、後の明智左馬助光春の如くであればよい。

三のサ一　君子は泰かにして驕らず小人は驕りて泰かならず　（孔子）

君子は、專ら義に從ふ。故に、心泰かにして、氣驕らず、よく隨ふべき人に隨つて、恥ぢとしない。小人は、一に私に從ふ。故に、氣驕つて、心泰かならず、何人にも隨ふことを肯んじない。

豊臣秀吉が、既に四方を伐り從へ、追つけ、西國へも發向すべき由、噂のあつた時、佐賀城主龍造寺隆信は、

『著し、秀吉といふ人が、天下守護の器量のある人ならば、喜んで隨身し、自ら、西國の先手ともならう。それでなければ、討ち果す迄ぢや。』

といつて、秀吉の西下を待ち受けた。

強情我慢、隨ふべき人にも隨ひ得ないのは、小丈夫の事である。男子須らく隆信の雅懷がなければならぬ。

三のサ二　思ひ立つたが吉日　（和諺）

分別、勿論、大切である。孔子も、

暴虎、馮河、死して悔なき者は、吾れ與せず。必らずや、事に臨んで懼れ、謀を好んで成さん者なり。

といつてゐるが、それにも程度がある。事は、分別に依つて成るのではなくて、斷行に依つて成るのである。百年の分別も、以て一事を成すに足らぬ。

隆信の言に、

『分別も、久しくすれば、寢てしまふ。』と。

長分別は、確かに寢る。即はち、斷行の勇氣が失はれて、結局、何事をも成し得ずに終る。寢た分別は、起きた無分別にも劣るであらう。事を成さんとする者は、思ひ立つたを吉日に、斷然決行すべきである。

三の廿三　名を好めば爲さゞる所あり　（江村專齋）

名利、兩つながら、好んではならぬ。已むなくんば、寧ろ名を取る。利を好む者は、利害次第、親をも棄てやう。主人にも背かう。朋友をも賣らう。どんな事でもしやう。名を好む者は、幾分、しない所がある。

戸次鑑連、高橋鎮種二人は、大友氏の臣である。その主義統は、初めて豊臣秀吉に謁した時、これに語つて、

『大友家は、代々、九州の探題でござりまするが、この八九年來、龍造寺、秋月など、某に反いて、自意を恣ゝに致しをりまする。他の侍共は、朝には秋月に行き、夕には龍造寺に從ふといふ風で、恥ぢを知らぬ者ばかりでござりまするが、たゞ、戸次、高橋兩人のみは、義を守つ

て失はず、耻ぢのある者でござりますれば、御家人としてお召し抱へ、然るべきかと存じまする。』といつた。秀吉は、この言葉に從つて、二人に朱印を與へ、家人としたといふ。

が、利害によつて進退し、得失によつて去就する者は、今の世には、特に多い。畢竟、耻ぢを知らないのである。善を好まないは勿論、名をさへ好まないのである。厭ふべし！

三の廿四　小なる事は分別せよ大なる事は驚くべからず

（德川光圀）

何事にも、勇氣を要する。要は、勇氣の使ひ方を誤まらないに在る。即はち、小事には、油斷し易い。油斷は、失敗の因である。篤と分別

してかゝる。大事には、怯れ勝ちである。怯れゝば、自ら倒れる。驚き擾れず、最も大膽に振舞ふ。これを適當なる勇氣の使ひ方とする。

豊臣秀吉との軍に、小早川隆景は、弟吉川元春が、左右、勇氣に逸るのを憂ひ、使者を以て、

『敵は、尼子如きの小敵ではない。短慮は、功を成さぬ。愼しんで事をせられよ。』と注意した。元春の答へに、

『尼子勝久等の小敵には、たゞ負けない工夫をすればよい。敵は、次第に衰へて、結局、消えてなくなつてしまふ。即はち、小敵には恐れにやならぬが、大敵を恐れて、たゞたゞ、大事をのみ取つたのでは、敵に氣を呑まれて、大敗に至ること必定ぢや。秀吉如きの大敵に對しては、少しも恐れず、勇み立つた方がよい。父元就公が、三千の兵を以て、陶晴

賢の二萬人に對し、十死一生の戰ひをせられたなどは、よい龜鑑であらう。』とあつた。亦た、この心である。

而も、これ、武將のみの事ではない。勇氣は、困難に對して、必要なものである。困難の敵が大きければ大きい程、益す勇氣を奮ひ起して、大膽に振舞ふべきであるが、一般には、氣怯れがしてしまひ、小困難に對してのみ勇氣があつて、油斷の極、輕卒に事をして、失敗を演ずる。これ、勇氣の使ひ方を間違へてゐるのである。勇氣の要らない時に、勇氣があつて、勇氣の要る時に、勇氣がないのである。

三の廿五　士道に志して惡衣惡食を恥づる者は未だ與に謀るに足らず　（孔子）

古人質素の風を聞く毎に、痛憤に堪へないのは、今人の奢侈である。

天正十年、瀧川一益は、主人織田信長の命に依り、關東管領として厩橋へ下つた。到着早々、諸將の訪問を受けると、

『たつた一枚の衣服が、垢づいたので、洗濯した所でござる。裸で對面も如何？　暫時、お待ち下されよ。』と告げさせ、衣服の乾くのを待つてこれに逢つた。當時の諸將は、皆な、こんな風であつたのである。畢竟志が、專ら、功を立てるに在つて、衣食の事などを考へる暇がなかつたのである。

因つて思ふに、今の人が、衣食の問題に沒頭し、奢侈を事とするのは志らしい志がないのである。嘆ぜざるを得ない。

三の廿六　その爭ひや君子なり　（孔子）

爭ふ中にも、敵に對して同情があり、極度迄は、攻擊しない。これが君子の態度である。

島津家久は、義久の弟である。天正十四年十二月、戸次川の戰ひに豐臣秀吉の先鋒長曾我部元親を破り、元親の嫡子信親を討ち取つた。敗軍の元親は、濱邊を指して引き退いたが、折柄の干潮に、船を出すことが出來ず、如何はせんと當惑してゐると、家久は、川上久右衞門を使者として、

『今度、御子息を討ち取りしこと、弓箭の道とて、是非に及び申さぬ。御邊には、緩々と潮を待つて御出船、然るべう存ずる。』と告げさせた。

人の爭ひは、常に、斯くありたいものである。

三の廿七　賢を賢として色に易ふ　（子夏）

眞に勇を愛する者は、敵の勇をも愛して、その敵である事を忘れる。例へば、眞田昌幸の如くである。

昌幸は、甲斐の武田氏に屬して、信州上田城に住した。武田家滅亡後の事である。室賀兵部を攻めた時、敵の一騎、六尺裕かの大男が、城から五町ばかりを乘り出して、附近を偵察し、引き揚げるのを、大熊五郎左衞門の足輕が見て、後を追ひながら、

『遁すものか。』と呼びかけた。彼の武士は、振り向いて、一瞥を與へた限り、靜々と退く樣子が、殆んど、物の數ともしないやうである。昌幸

は、左右を顧みて、

『あれは、何者ぢや。』と問うた。何れも、

『あれこそ、音に聞ゆる松澤五左衛門でござりませう。』と答へた。

左右する中、足輕は、五左衛門に追ひつき、斬つてかゝつた。五左衛門は、猿臂を伸べて、足輕の髻を攫み、地上に捻ぢ伏せ、足で踏みつけて、首を搔き、田の中へ打ち捨て、然あらぬ體に、再び、馬を乘り返すのであつた。

斯くと見た味方の士は、

『殘念ぢや。』とばかり、手に手に槍を執り、馬に打ち乘り、追ひかけやうとした。昌幸は、急ぎ、それを制して、

『止めよ、止めよ。今に室賀を亡して、彼の者を我手につけるのぢや。

可惜ら武士を殺すではない。』と、討たしめなかつた。

果然、五左衛門は、後ち、昌幸の臣となり、種々の武功を顯はした。

勇を愛するのみではない。眞に賢を愛し、眞に善を愛する者は、敵の賢、敵の善をも愛して、その敵である事を忘れる程でなければならぬ。好めば賢者、惡めば愚者、味方は善人、敵は惡人といふやうなのは、到底、至つたものではない。

三の廿八　道前に定まれば窮まらず　（中庸）

平生、準備のある者は、事に臨んで窮せず、悠々として、これに處することが出來る。

天正十三年閏八月、德川家康は、大久保忠相等をして、昌幸を信州上

田城に攻めしめた。時に昌幸は、人と碁を圍んでゐたが、敵兵の城際近く押寄せて來たことを聞くと、早速湯漬けを喫し、豫ねて用意の、悍馬五十頭に、槍、長刀を結びつけたのを、大手の橋の邊りに群がる敵の中へ、一度に追ひ入れた。この怪物の强襲に、敵の亂れ立つ所へ、兵士五六百人、槍先を揃へて、突いて出た。流石の德川勢も、これには溜らず隊を亂して敗走した。

昌幸が、危急の際、尙ほ且つ、碁を圍むの餘裕を存したのは、豫め、準備があつたればこそである。而も、準備中の準備が、心の準備であることを記せなければならぬ。

三の廿九　海濶うして魚の躍るに從ひ天空しうして鳥の飛ぶに任す　（林羅山）

他人に對して、安りに城府を設け、これを拒み、これを斥け、疑ひ、恐れ、忌み、憚つて、理由もなく事を秘するのは、男子の事ではない。大丈夫、宜しく、天空海濶の度量を以て、開放的に振舞ふべきである。

關ヶ原の役に、昌幸は、西軍に味方し、德川秀忠の西上を阻止する、上田城を固守した。秀忠から、使ひを以て、降服を勸めて來ると、『秀賴公の御爲め、某は、飽く迄、當城を守り申す。若し、お攻めとあらば、一矢參らするでござらう。』と答へ、斷乎として、その勸めを卻けた。

時に、秀忠の先鋒は、城の彼方、冠ヶ嶽に在つた。秀忠は、島田兵

四郎を急使として、これに告げる事があつた。兵四郎は、たゞ一騎、城の大手に至り、門を敲いて、

『拙者は、江戸中納言の家の者でござる。急用を帶びて、先鋒の軍へ罷り越す所、地理不案内の上に、お城を廻れば、餘程の廻り道と承り及ぶ。何卒、御城内をお通し下されたく、偏へにお願ひ申す。』といひ入れた。門番の者は、一驚を吃しつゝ、斯くと昌幸に告げた。昌幸は、莞爾として、

『よし、通してやれ。』と命じた。斯くて兵四郎は、大手から搦手へ抜け極めて迅速に、使命を果すことが出來た。

さて歸りには、搦手の門を敲いて、同樣、城内を通過せんことを請うた。昌幸は、少からず感嘆し、自身、兵四郎を引見して、

『斯く城内を通らるゝからは、よく要害を見覺え置き、城攻めの時、先登の功を立てられよ。然し、要害は、城廓の固めよりも、寧ろ、大將の一心に在るのぢや。』と語り、これを案内して、城内、殘る所なく縱覽させた。兵四郎は、深くその厚意を謝し、大手の門から引き取つて、秀忠に復命した。

これを聞く者は、

『城門を開いて、敵の使者に道を貸すなどは、古來、その例がない。借る者も借る者なら、貸す者も貸す者ぢや。まことに、英雄の所爲ではある。』と、口を極めて嗟賞した。兵四郎の大膽不敵は然ることながら、昌幸が海濶の度量に至つては、古往今來、誰れあつて及ばんや、である。

昌幸は、最も秘すべき城内の要害を、敵人にさへ公開した。我々小丈

夫は如何？　微々、いふに足りない事を、糞隠しに隠して、朋友、知人にさへ知らせまいとする。狭量、驚くに絶えたりである。臆病なのか、悪人なのか。悪人程——自ら省みて疚しい所のある者程、左右、事を秘密にしたがる。

三の三十　質朴なのは英雄の本色である　（マコーレー）

中味のない小人程、表面を飾りたがる。服装や持ち物に依つて、世間を胡麻化さうとするのである。大人は、それをしない。

關ケ原役後、昌幸は、死一等を減ぜられて、紀伊に流され、高野山の麓に蟄居した。時に、刀の柄に木綿の打紐を巻いてゐるのを見て、笑ふ者があると、昌幸は、

『体に錦を着ても、心が愚かでは、何の役に立たぬ。同じ道理で、この魂を見られよ。』といひながら、抜いて見せた。大小共、立派な相州正宗であつたといふ。

刀の眞價は、装飾にはない。人の眞價は、服装にはない。大人が、外見に介意せず、質素、質朴に身を保つ所以、思はなければならぬ。

三の卅一　道理に従つて怒りを制し得る人はこれを勇士と稱してよい　（プラトン）

敵の事といへば、是非を併せて、これを非とし、善悪を混じて、これを悪とする。敵の主張にも道理を發見し、甘んじてその道理に従ひ得るのは、たゞ勇士の事である。

稲葉一鐵は、美濃の士である。後ち、織田信長に仕へて、剛勇の名があつた。嘗つて、普請人夫の中に、曲者のあるのを見、捕へて糺問し、それが、己れを父の仇とし、報復を圖る者であることを知ると、深くその志に感じ、

『隨分、吾等を狙ひ撃て。』といつて、これを放還した。

その後ち、一鐵が死ぬと、彼の者は、刀を一鐵の墓標に加へ、その側らに自殺した。

一鐵が、己れを敵とする者を縱し、身を以て、その狙撃するに任せたなどは、古來、一あつて二なき所、實に、非常の擧としてよい。一鐵は當に、戰陣の勇者であつたのみではなく、又た、道理に從ふに於ての勇者であつたのである。

然り、勇者でなければ、道理には從はれない。道理に從ふのは、不道理に逆ふのである。怒り、怨み、妬み、慾などいふ、不道理に逆ひ、これに打ち克つのでなければ、道理には從はれない。而も、

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。（王陽明）

で、不道理に逆ふには、餘程の勇氣が要る。世間、戰陣の勇を知つて道理に從ふの勇を知らないのは如何？

一、なくてはならぬ人となるか、あつてはならぬ人となれ。沈香も焚け屁も放け。

一、牛羊となりて、人の血肉に化せずんば、豺狼となりて、人の血肉を喰ひ盡せ。

一、身を棺槨の中に投じ、地下千尺の底に埋了したる以後の心に非ずんば、與に天下の經倫を語るべからず。道義、道德も、それからの事なり。（河合繼之助）

四の一　溝をばずんと飛べ

（澤庵和尚）

溝を飛ぶには、ずんと飛ぶ。事をするには、確信を以てする。狐疑して飛べば、溝へ陷る。躊躇してすれば、事を破る。

小田原の長臣福島左衞門太夫綱成は、戰ふ毎に、『勝つた！　勝つた！……』と喚きながら、敵陣へ突き入つたが、向ふとして破れぬはなかつたといふ。

綱成は、必らず勝てるといふ確信を以てして、敵に打ち勝つた。我々も、必らず成るといふ確信を以てして、事を成すに足る。

『巧く行くか知ら？　覺束ないが、左に右やつて見やう。』位の考へでしたのでは、大事どころか、小事も成らぬ。必定、溝へ陷るの外はない。

四の二　その身を外にして身存す　（老子）

自分を措いて、専ら、人の爲めを思へば、人は、その誠に服して、心から、推尊して來る。これ、自分を措いて、而も、自分を立てるのである。

人に長たる者は、最も、這般の用意がなくてはならぬ。大須賀康高の如くであれば、則はちよい。

康高は、德川氏譜代の臣で、横須賀三萬石を傾した人である。戰場に臨む毎に、己れは、謀略を專らにして、功を貪らず、配下に敎へ、從者に諭して、功を立てさせることに注意した。時人は、以て、長者の風ある者とした。

部下の爲めに、己れを外にするのは、まことに、長者の風である。今の人に長たる者、果して、この風を存するか。この風を存するべく、狹量に過ぎはせぬか。

四の三　聖人は常の心なし百姓の心を以て心と爲す　（老子）

昔し、明君といはれた人は、己れの一了簡からのみ政治をしないで、百姓の心を心とし、その望みに副ふやうと心がけた。これ、民の心服する所となり、その身、亦た、安泰なるを得た所以である。

堀久太郎秀政は、初め、信長に仕へ、後ち、秀吉に屬して、越前北莊三十九萬石に封ぜられた人である。或る時、城下の町辻に大札を建て、租政三十餘條を書き出した者があつた。家來の誰彼は、談合の上、秀

政へ見せ、

『斯やうな惡戯者は、後日の爲め、屹度、搜し出させて、仕置に行はれ然るべう存じまする。』と進言した。秀政は、倩々と讀み終ると、起つて袴を着け、手を洗ひ、口を漱ぎ、三度、彼の札を戴いて、

『今日、予に向つて、これ程の諫言を敢てする者は、恐らくあるまい。然らば、これ、偏へに天の賜ものぢや。この札こそは、長く、吾が家の寶物であらう。』と、袋に入れ、箱に納めて、保存することとし、尋いで奉行、代官など、その向きの役人を召し集めて、細々に協議を凝らし、家中の仕置、領民の政務に就いて、種々、改善する所があつた。

世に秀政を稱して、名人左衞門といつたのは、これ等の事を指したのであるといふ。

昔の諸侯にさへ、百姓の心を心として政治を行ふこと、秀政の如き人が間々あつた。今の廟堂に立つて、國政を行ふ者、今の議會に出て、國政を議する者、果して這般の心がけがあるか。國利よりも黨利を貴び、民福よりも私福を營む弊はないか。封建時代の政治家の事が、開明時代の政治家の爲めに、儀範を供するなどは、奇である、妙である。

四の四　牛溲馬勃敗鼓の皮も俱に收め並び蓄へ用を待ちて遺すことなき者は醫師の良なり　（韓退之）

一見、何の役にも立たなささうな者も、使ひ方一つで、それ相應に用をする。良醫は、牛の小便、馬の糞、破れ大鼓の皮さへも、これを藥用として、病氣を癒すといふ。人に長たる者は、亦た、この心がけがなく

てはならぬ。

秀政の家に、年中、泣き顔をしてゐる男があつた。兩眼からは、絶えず涙を流してゐる。眉を顰めて、悄然たる樣子が、見るからに、滑稽でもあり、忌はしくもあつた。近習等が、

『あの男の顔は、如何にも不吉でござりまする。世間でも、笑つてをりまする。早く、暇をお出しなされませ。』と勸めると、秀政の答へに、

『一應、道理ぢやが、大名の家には、色々の者を扶持して置くがよい。あの男、不吉であるだけに、法事、弔問の使者などには、持つて來いぢや。』とあつたので、聞く者は、その寛容に服したといふ。

秀政の心を以て人を使へば、人に廢人といふはない。如何なる愚人、不束者も、用ふるに足る。一過失、一缺點の爲めに、安りに人を棄てる

者は、宜しく三思すべきである。

而も、這般の用意のあるべきは、獨り、人に長たる者のみではない。朋友に對しても、知人に對しても、廣く世間の人に對しても、やはり、これ程の寛容があるのでなければならぬ。

四の五　自ら反して縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん

（孟子）

何人も、道理には從はなければならぬ。道理に據り、道理を味方として事をする者の眼中には、權勢、富貴、一として畏るべきものはない。

秀政の卒した時、その子秀治の幼弱なのを思つて、秀吉は、遺領北の庄を沒收せんとし、容易に、跡目相續を命じなかつた。秀政の臣堀直政

は、大に怒り、その子直寄を使ひとして、

『故左衛門には、多年の勤功がござりまする。萬一、跡目お許し下さらずば、參つて御椽を汚しまする。』と、秀吉に告げさせた。秀吉は、已むなく秀治の相續を許した。

が、道理に據つて、權勢に抗すること、甚はだ難い。それといふのが私心があるからである。私利を慮るからである。

四の六　その鋭を挫きその紛を解きその光を和げその塵に同ず（老子）

才智は、以て大事を成すに足らぬ。才智に依つてされる事業は、大概知れてゐる。

小田原征伐の時、豊臣秀吉は、徳川家康に向つて、

『こゝに二つの不思議がある。御存じか。』と問ひ、

『自分は、匹夫から起つて、天下を取つた。三樂は、あれ程の智者でありながら、一國をも得保たぬ。これが、二つの不思議でござる。』と語つた。三樂は、世に所謂る片野の三樂で、この人、實に、智仁勇兼備の將であつたが、不幸、大成するに至らなかつた。秀吉の不思議とした所以である。

であるから、才智、決して恃むに足らぬ。寧ろ、才智を韜匿し、なるべくこれを用ひないのをよしとする。才智を用ひずして、徳を用ひる——これでこそ、能く大事業を成すに足る。古今、東西の大事業は、すべて、徳に依つて成されたので、才智に依つて成されたのではない。

否、才智は、失敗の因である。諺に、

才子多病。

といふ。所謂る多病は、失敗の多いことを意味する。今の世には、才子が多い、智者が多い。相戒しめて、三樂の轍を履まざるべきである。

四の七　可なり簡なり　（孔子）

繁文縟禮は、人を治める所以ではない。これに臨むに、簡易簡單を以てして、人、始めて、その支配下に立つに堪へる。

徳川氏譜代の臣本多作左衞門重次は、爲人の極めて簡易簡單な人であつた。家康が、まだ三河に在つた頃、高力與右衞門清長、天野三郎兵衞康景の外、重次を擧げて奉行とし、國政に當らせることにすると、家中

の取沙汰に、

『今度ばかりは、殿の御見立て違ひぢや。作左が、何うして、人の上に立てる者か。』といふのであつたが、事實は然らず、重次の仕方には、些の非道も、偏頗もなく、且つ、てきはきと事を處置して行く、といふ風であつた。人々は、始めて、主人家康の明鑑に服したとか。

而も、簡易簡單なるべきは、獨り、政治の事のみではないのである。

四の八　言葉多きは品少し　（和諺）

人の生活は、衣食住を始め、萬般の事、皆、簡易なるべきである。心の用ひ方、最も簡易なるべきである。言葉も、やはり、簡易なるべきで

重次は、公事の仕方が、簡易であつた如く、私事の仕方も、同様、簡易であつた。或る時、外出先から妻への狀に、

一筆啓上。火の用心。お仙泣かすな。馬肥せ。かしく。

とのみ認めた。お仙は、その子仙千代の事である。

これでも、充分、用は足りる。用さへ足りれば、何も、多言の必要はない。

雀の千口より、鶴の一聲。

の諺もあれば、人の言葉は、宜しく、斯くの如くに簡易なるべきである。

簡易生活の第一歩は、此邊に在らうか。

四の九　人を見て法を説け　（和諺）

如何に高遠な、立派な説であらうとも、聞く者に解らぬのでは、醉人の囈語と擇ぶ所がない。宜しく、人を見て法を説くの用意があるべきである。

三河で、掟の條々を書き立て、高札に造つて、領内へ示したが、百姓等は、一向、それを用ひやうとしない。役人一同、迷惑の折柄、重次が口を出して、

『無智の百姓に、こんな難かしい文言は、通用せぬ。では、拙者にお任せあれ。』といふと、早速、筆を執つて、文字は假名を用ひ、最も簡單に平易に、「何々の事」といふ風に書き改め、

右をそむくものは、作左衛門しかる。

と附け加へた。爾來、領内を通じて、法令が、よく行はれたといふ。

即はち、斯くの如くであればよい。

四の十　士は己れを知らざる者に屈して己れを知る者に伸ぶ　（晏子）

賢者も、己れを知る者に使はれなければ、その賢を見はすことは出來ず、智者も、己れを知る者に用ひられなければ、その智を示すことは出來ない。口を噤んで、命これ奉じ、機械的に働く位ゐが關の山である。その不本意は如何ばかり？　主人としても、不利益極まる。

重次は、主人家康に對するにも、いはんと欲する所をいひ、爲さんと

欲する所を爲して、少しも忌憚しなかつた。或る時、領内を檢分して、岡崎から池鯉鮒へ向ふ途中、よく出來た瓜畑を見ると、

『如何にも見事ぢや。』と賞め、

『作り主は、何といふ者ぢや？』と問うた。番人が出て、

『これは、殿樣のお瓜でござりまする。手前共中間の者が、番を致しまする。』と答へた。重次は、聞くと等しく、

『さてさて、興の醒めた事ぢや。三河、遠江、駿河三個國の主が、瓜作りになられたか。武士の爲ぢやない。そこ退けよ。』とばかり、馬を瓜畑へ乘り入れ、散々に蹂躙して去つた。番の中間等は、驚き呆れて、早速岡崎へ行き、斯くと申し上げた。家康は、たゞ笑つて、

『作左がしたか。仕方がないさ。』とばかり、復たいはなかつた。

重次の所爲は、亂暴に過ぎた。將た、淺慮の嫌ひがあつた。亦た以てその簡易ぶりを思ふことが出來る。

重次の簡易簡單な人と爲りは、然る事ながら、亂暴、斯くの如きを敢へてし得たのは、深く家康に知られて、その愛重する所となつてゐたからである。己れを知る者の下に在つて、充分、手足を伸すことが出來たのである。知己なるかな。

四の十一　主と臣と同じきは昌へ主と臣と同じからざるは亡ぶ　（三略）

君臣、相知り、相和して、始めて隆昌を期し得るものは、一國然り、一家、亦た然りである。

阿部磧に、一つの大釜があつた。傳へいふ、昔し、人を煮た釜であると。家康が、命じて濱松へ運ばせやうとする途中、圖らず出遇つた重次は、仔細を聞いて、大に立腹し、人夫等に命して、悉く擊ち碎かせ、『濱松へ參つて、殿に申し上げよ。志を天下に存する人に、こんな釜の必要はない筈。因つて、作左衞門が吩咐けて、碎きましたと、具さに申せ。一言でも、いひ洩したら、後で、爲めに惡からう。』と嚴命した。

奉行の者は、急ぎ、濱松へ馳せ着けて、この由を上申した。家康は、大に赤面し、重次を召して、

『自分が惡かつた。免してくれ。』と告げた。重次は、感極つて泣いた。時の人は、君臣和合の狀を想つて、これ亦た、少からず感動した。

君臣の間が、斯くの如くに和合してゐたればこそ、家康は、能く一統

の志を遂げ、德川氏三百年の祖業を建て得たのである。

君臣和合の道如何？　要は、互ひに利心を捨てるに在らう。今の主從關係の如きは、孟子の所謂る、

上下、交も利を征りて、國危からん。

の「國」を改めて、家、危からんの狀態に在るもの、比々皆然りである。家康主從の事、鑑みなければならぬ。

四の十二　國を憂ひて家を忘れ軀を殞して難を濟ふは忠臣の志なり　（文選）

眼中、君があつて、己れはないといふもの、これ、忠臣の心である。念頭、親があつて、己れはないといふもの、これ、孝子の心である。一

切の善德は、無我に於て極まる。無我の善こそ、善の至極したものである。これを誠といふ。

長湫の役後、重ねて合戰あるべき由、專らの噂に、家康は、岡崎の守將を擇んで、人を得ずにゐると、本多正信が、

『己れの妻子を殺して、城と存亡を共にする程の者にお命じ、然るべきでござりませう。』と進言した。家康は、然らばといつて、本多重次に命じた。

重次の如くにして、始めて、眞の忠臣、誠の人といはれやう。

四の十三　私臣は忠ならず忠臣は私せず　（後漢書）

小人は、思案が多過ぎる。君に仕へ、親に事へる者は、專ら、君の爲